分備えていることは問違いない。

窪地、

狩猟地等に恵まれていること等を見ると生活の可能条件は充

#### 第二章 歴 史

#### 節 原 始

## 第一

(--)

序

文

れている。この間、人類は徐々に新しい文明を開き、今日に至るま 又人類の歴史はまことに長く、数十万年あるいは二百万年ともいわ 段丘や扇状地があって、その生活条件を助けている湧泉、南面する 旧石器時代の痕跡も今のところ発見されず、今後の課題となってい 文字の記録は勿論、遺物遺跡は皆無であって知ることができない。 で複雑な歴史を展開させている(『福島県史1』)。 古代文化といっても、縄文期以前に対しては何の手がかりもなく 柳津町に人間がいつ頃から住みついたかは全くわかっていない。 しかし生活の舞台としては、いたるところに発達している河岸

証はなく、今後の調査研究によって古墳文化の解明があるものと思 ろは黒沢の丸墓、中村の墓地、 古代文化の中には古墳時代までが考えられるが、古墳らしいとこ 麻生の「オイセサマ」などあるが確



オイセサマ(麻生)

い。ゆえにここで取上げるものは主として縄文文化である。 われる。弥生式時代の遺物、 遺跡は極少数で、まとまった報告はな

### (=)会津地方における旧石器時代

以前の文化については今後にかかっているといってもよいであろう。 次表の十二か所で、会津においても僅少である。それで大体一万年 旧石器時代、新石器時代、無土器時代の遺跡は福島県においても

# この時代においては打製の石器でナイフ・石刃・彫刻刀などが出

11,000

遺跡名

橋 本 A遺跡

陣ガ崎ル

滝ノ原ル

天神原〃

天神山 "

中皿久保 "

乙字ガ滝 〃

畑 "

沼 "

田 "

神 "

坪 //

大

貝

大

塩

В "

土するが土器は見あたらない。

/=		
年代	C14による縄 文時代の編年	会津の主なできごと
1,000	古墳時代	この地方を相津といっていたと古事記に記されている 高田の伊佐須美神社が建てられたと伝えられている
2,000	弥生時代	耕作がしだいに盛んになり集落を統治する階級もできる 農耕が行われ、水田で稲作、鉄器も使われだした
3,000	縄文晩期	精巧な石器をつかい住居も敷石などするようになった
0.0	縄文後期	平野部に集落をつくって生活するようになった
4,000	縄文中期	堅穴住居などに定住する生活が始った
5,000 6,000	縄文前期	土器の型式が次第に統一されてきた
7,000 8,000	縄文早期	狩や漁などをして生活していた。土器がつくられていたが地方によってまちまちの形や質であった
9,000	縄文草創期	

旧石器遺跡地名表(『福島県史 I』による)

在

所

u = 2 - 121

上太田字陣ガ崎14-80

双葉郡楢葉町大字北田字天神原 1

" 大字上繁岡字天神山

耶麻郡猪苗代町大字磐根字大神 1,663 - 5

原町市橋本町1-101

〃 馬場滝ノ原

いわき市泉町下川字大畑

安達郡大玉村大山字大皿久保

福島市大字田沢字貝沼

岩瀬郡鏡石町成田

須賀川市乙字ガ滝

" 高郷村塩坪

地

#### (三) 縄文文化

略を藤森栄一氏により、更に郷土史読本『会津の歴史』(会津若松 市教育委員会)を引用して表に整理すれば次のように考えられる。 器時代より土器の時代に移って来たのである。 縄文時代は普通、早期・前期・中期・後期・晩期に区別され、 との時代の編年の大 石

13 12 11 10 9 8

阿闘寺遺跡 善神平遺跡

(大字胄中字上野、阿盟寺跡

焼がまはなくとも火力によって焼き、器物を作り、 には美しい紋様や、たくましい紋様のある文化があったと思われる。 木の実を貯蔵し、あるいは蒸し器など生活必需品であったに 水を貯えたり、

これによれば縄文時代は約七千年の長い間続いたと見られ、そこ

相違ない。

げられる。 ないが、土器石器の散布地等より推測して次の地点が遺跡としてあ しかし、まだ全地域におけるそうした遺跡の発堀調査は行われてい 柳津町においては縄文時代の土器片や石器等各地に見うけられる。

1 下中沢遺跡 (大字細八字下中沢)

(大字細八字宝)

宝遺跡 牛越遺跡 大字藤字牛越

5 向館遺跡 、大字小椿字向舘 4 3 2

藤居平遺跡

(大字藤字居平)

6

古屋敷遺跡

(大字小椿字古屋敷)

7 塩ノ半在家遺跡 (大字柳津字塩ノ半在家)

小和瀬遺跡 石生前遺跡 (三島町大字桧原字小和瀬 (大字郷戸字石生前

松ケ下遺跡 (大字久保田字松ケ下)

砂子原遺跡 (大字砂子原字居平)

(大字牧沢字善神平

三島町+佐渡畑、 柳津町+下中沢、 入間方

色がある。

田中遺跡 (大字飯谷字田中八五七)

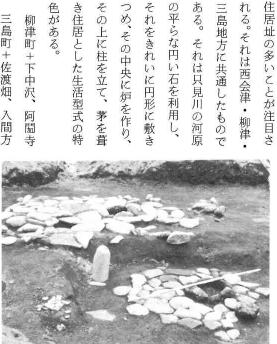
14

いる。 の末端等自然林を背に負って野獣や山菜の豊富な場所が選定されて 谷があって漁労上に便益をあたえ、段丘と段丘の傾斜地や、 り生活上の条件が満たされている。 時の生活基盤がこうした平地を利用し、又いずれも清水の湧出があ 遺跡と地形 これ等の遺跡のほとんどが河岸段丘の上にあって当 又近くに大きな川か、 小さな渓 扇状地

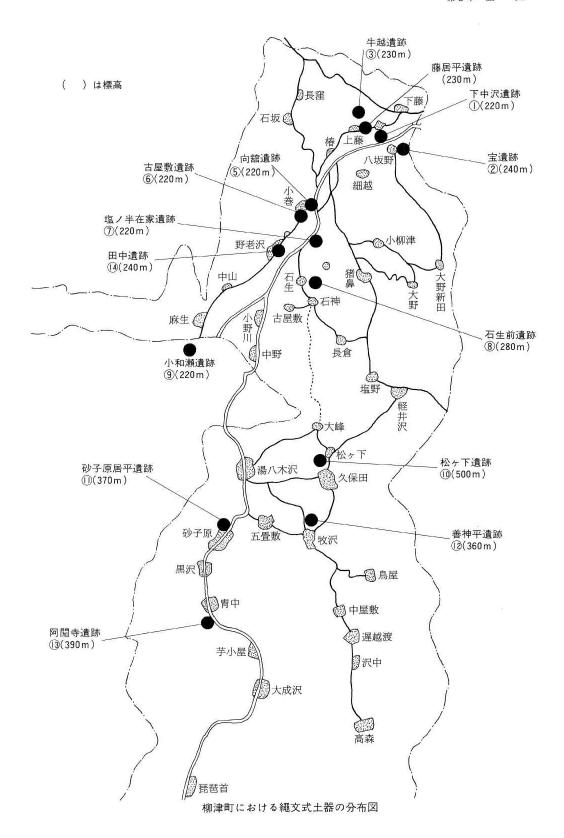
さなど縄文人の生活条件の妙味が推察される場所に多い。 更に遺跡に立つとき眼界の開けた場所であり、附近の自然の美し

敷石住居跡 縄文人の生活を推測するとき、柳津町の遺跡に敷石

ある。 き住居とした生活型式の特 その上に柱を立て、茅を葺 つめ、その中央に炉を作り、 それをきれいに円形に敷き の平らな円い石を利用し、 三島地方に共通したもので れる。それは西会津・柳津・ それは只見川の河原



二段になっている敷石住居址(佐渡畑遺跡)



※この土器の編年は次表に示す時代と推定され 3

目をひいている。こうした縄文文化が柳津町にあったことは町民 出土(羽賀十市氏所蔵)のものがある。 更に弥生時代へ移るのであるが弥生式土器は胄中 又藤居平附近にも晩期から弥生への移行期らしいものが感じられる。 大きな誇りである。 **焰式土器(会津高田町竹原、** 縄文後期、 その代表的遺跡は石生前遺跡である。 あまりにも有名である。 縄文文化の華やかさを物語っている。 晩期の型式の土器は小和 現在福島県文化センター 斎藤正衛氏所有) 瀬 石生前遺跡から出土した火 砂子原遺跡に見られる。 弥生土器片(胄中出土) はその代表的なもの 会津地方における繩文式土器編年表 に陳列され注 権現堂、 金山 Ι

治子子 畑 晚 金 Ш 田 畑  ${\rm I\hspace{-.1em}I}$ 域 宇 内 田 台 10 期 狐 山い 3 沢 小 和 瀬 原 張 田子畑、いさご沢 砂 子 安 後 下 原い さ 2 沢 77 期 村いさど沢、大塚山 大 本本 原 В 能 中 能 原 Α 押 立 3 て 沢 塩 ノ 半 在 古屋敷、石 下 中 沢、 か B 大竹 " 花 在家 能原A 本 1 原 押 立. 竹 ノ 滝ノ前、 石生前 聖ノ 宮  $\mathbf{H}$ 向 期 上ノ山皿 竹 花 A 塔寺、 III£ Ш 前 Ł Щ Ι 桜川B・上ノ山I 田 子 畑 桜 A2 期 桜 A1 JII 上 Ш 湯 { 上 ノ 山 常世達 { 湯達沢Ⅲ 東 早 原 湯達沢Ⅱ 湯達沢I 期 時 類似遺跡 代表遺跡 期 柳津町 地

B.C 200~300 墓料、上野尻 今泉 宮崎(旧) 西暦0--宮崎(新) 南御山(新)

200

0

があり、

の遺物は発見されていない。

縄文中期は土器の技術も目ざまし

縄文中期

津町

の遺跡は、

縄文中期以降のもので、

前

期や早期

胄中

に移る時代の遺物 弥生式土器片の出土は極少数である。 遺 砂めの 研究調査が重要である。 よって今後縄文晩期から稲

会 地 方 ※小滝利意「会津盆地の縄文土器について」より転載、会津 史談会誌36号所載 ※柳津町については同上表にあてはめて筆者が加えた

#### (四)

### 遺跡を訪ねて

下中沢遺跡 (柳津町大字細八字下中沢)

たと見られる。現にダム建設前はこうした魚類が多く見られた。 れる。東を流れる中沢は縄文期において只見川と共に鮭・鱒が溯行し 又沼沢湖火山の浮石層や砂礫層を浸透した清冽な清水の湧出が見ら 在の只見川の水面より三十メートルの高さを有し、日照時間も多く、 生活舞台と地形 附近は只見川の河岸段丘が標式的に発達し、 現 更

柳津町全域から見 丘に載っているが 具備する場所であ としての好条件を をもつ宝遺跡があ に南側には約十五 は標高と河川の本 すなわち下位段丘 ると見てよかろう。 ると中位段丘にあ 恵まれた生活舞台 メートルの標高差 下中沢遺跡は段 山地や原野に 牛越遺跡 下中沢遺跡

る。

その中間が中位段丘にあると見るべきであろう。 原 ては松ケ下(五○○メートル)、 流との関係において、藤居平・小和瀬等があげられ、上位段丘とし (三七○メートル)、 阿鵬寺 (三九○メートル)があげられるが 善神平(三六〇メートル)、

そして遺物包含層及びその上の地層は河成推積物と認められる。 その下部は河川の砂礫堆積層があり、更にその下部に軟質の凝灰岩 チの深さに鮮褐色の沼沢湖シラス層が約四十センチの厚さに推積し、 耕土は三十センチメートル位で、地表より八十センチより九十セン がある。 この地域は現在畑地にして煙草・野菜・桑園などに利用している。 いずれも地層は水平で洪積世以来地殻の変動は見られない。

点から見て、 いくつかの炉址の自然石が発見されている。 る。最近耕作器具の変化によって下部の遺構が破壊されているが、 複式炉址 この地区は遺跡・遺物の分布が広範に亘って存在する この附近の集落としては中心的存在であったと思われ

煮沸、 発見され、現在町体育館に復元し保管されている。複式炉は焚火や を形づくっている。 その中の代表的なものがA地区(東端の遺跡)から完全なものが 焼物をする場所と火種貯蔵用の甕の部と複合されて一つの炉

河石を利用している。 ンチメートル長さ一三〇センチメートルの規模のもので、 ル)場所に埋蔵されていた。大体の方向は N42°W に向き幅九十セ 発掘状況から見ると表土より比較的浅い(十五~二十センチメー 炉の中の焚火の部分の石は熱の為にほとんど 只見川の

敷石住居址

個の大きな石が発見され、

その附近から土器片が相当散布していた。

の地区は居住には最も条件のよい場所でその附近の桑畑の中から一

下中沢遺跡のC地区は清冽な清水湧出地である。

かった。この石の一方に敷石住居址があり、一方に埋甕(?)があ祭祀に使用されたものかどうかはとうとう突き止めることができな

には灰分や炭素分が発見されたが食

複 式 炉

程度である。その北側に接

げる場合その形体が崩れる

深く割れて、床土より取上

中央に径二十センチメートル、深さ二十三センチメートル位の火種甕があって、 トル位の火種甕があって、 その附近の石はほとんど火 力による割れ目はない。甕 が見られ発火装置を推定さが見られ発火装置を推定さ

定することができない。 にできなかったので、この炉が屋外にあったか屋内にあったかは断高い位置にあり、焚火の操作に便ならしめている。柱石の発見は遂更に断面を見ると、火種甕は炉の部分より約三十センチメートル

A 地区トレンチ平面・断面図

ること、更に附近から清水の湧出等から何か意味のある場所である ことが推定できる。

チメートル等大小さまざまで、ほとんど平坦な生活盤に一三五個の 用した敷石は只見川の偏平な自然石で径六十センチメートル×四十 の中にあり、広さは横五メートル、縦七メートルで南北に長い。 センチメートルのものや、小さいものは十センチメートル×十セン 敷石住居址は深さ三十センチメートルから三十五センチメート 石が敷いてある。

敷石住居跡

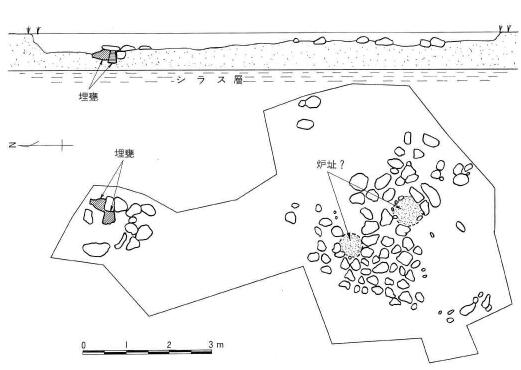
その附近の敷石や円

は得られなかった。

査するに灰・炭素の発見 か所あったが、些細に調 たと思われる)部分が二 われる(円形に石組みし

大体中央部に炉址と思

よりは、 礫の窪み穴などから見て る 見てよかろう。それでと 炉であった形跡は濃いと の敷石は配石遺構という 定した方が妥当と思われ 敷石住居址と断



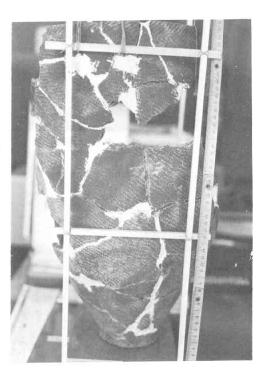
C地区トレンチ平面・断面図(敷石住居址・敷石埋甕遺構)

少量の 石組や、 部に平石が置いてある。 埋甕と断定すべきであろう。 鋭利な石器でたたいたような裂穴がある。土器片を取り上げる際、 は径二十九センチメートル、高さ五十三センチメートルの大型のも かし二個共大きさは同じで共に全面縄紋様である。又その甕の底は |細に検討したが貯蔵物らしいものは何も発見できなかった。ただ 個は復元出来たが、 (マッチ棒二本分位)炭素が発見された。これは甕の部分の 甕の大きさ、あるいは敷石住居址に近いなどから埋葬用の 深さは約五十センチメートル、甕の大きさ 他の一個は土器片の不足で復元不能。 甕棺の出土状況





甕棺 No.2



敷石の下に二個折り重なって倒れている。

あたりは石組をなし、上

甕棺 遺構

敷石住居址の西方約五メートルの距離に大きな埋甕が

甕棺 No.1

から発見されている。 で囲まれている。深さは比較的浅い(約二十センチメートル位)所 (妊婦)であって、附近に軟い凝灰岩をもって作った石組様のもの 土偶の世界

使用したかは諸説があり解明されないが、妊婦が多く、頭・脚部が 妊婦の様相を呈し、頭部と脚部は破壊されている。土偶は一体何に 土偶の高さは約十センチメートル位の比較的小型のもので女性の

土偶はB地区から二個発見されている。一個は女性 んだろう。

土偶の出土した場所

土偶の背面



土偶二種

記紀に現われる地母神は殺されてはじめて作物を産んだ。 うどこへもいかずに産み続けることだ。 関係を持つことは考えられる。 いるのだと思われる」といっている。 中期の土偶はそういう祈りがこめられて 殺されて毀されることは、この女神がも 文人の祈り、 信仰とこうした土偶が深い

り像もあったが、いずれも女性像で必須条件としては乳房・脐・正 されて、堅穴の不特定の位置に隠された。座像も立像もそれから吊 つことも考えられ興味ある問題である。 壊されていて、乳房などは誇張されているなど性とのかかわりを持 もあるが、屋根裏でいぶし通されるのもある。こういう神は一体な 中線、それに腹・腰部膨満があげられる。出入口の踏まれる位置の 藤森栄一氏は「土偶は破砕

見されている。 ただし石皿のごとく研磨用に使用したと思われる石器は案外多く発 けてのものであり、 のものか、 土器や石器 あるいは住民移動に際して携行したものかは不明である。 石器類は案外少ない。 やがて晩期・弥生に移る時代への推移として当然 それは縄文中期より後期に

層であるが、 なっている。 四十センチメート 包含層は二十センチ 土器は主として縄文中期より後期にかけてのものが多く、 ルより六十センチメー × 1 ٢ ル の厚さを有 ٢ ルにかけてが包含層と A地点に於いては単 地表よ

В

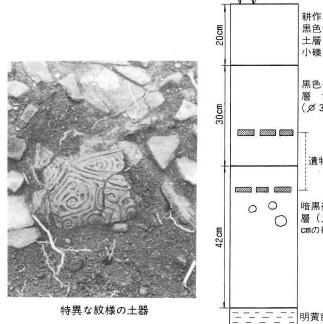
C点においては深層七十センチメー

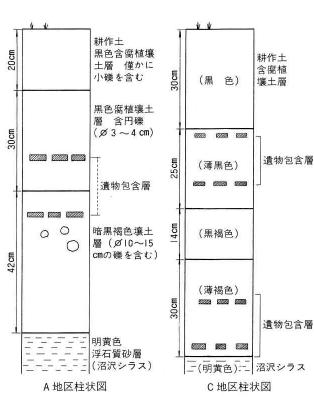
۲

ルと浅層三



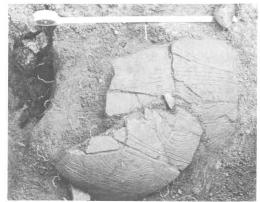
繩文中期(大木式)







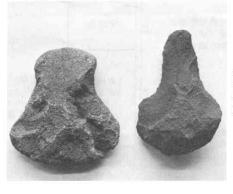
繩文中期末



繩文後期(堀ノ内)



繩文後期



打製石斧



石 皿 片

### その他の遺跡

(B)

## 宝遺跡(標高二四〇メートル)

段丘上にある。全くその痕跡を見ることができない、下中平遺跡よりも一段高い全くその痕跡を見ることができない、下中平遺跡よりも一段高い縄文中期でも柳津においては古い方である。現在は水田になり、

## 藤居平遺跡 (標高二〇〇メートル)

る地帯でもある。

る地帯でもある。

なと、清冽な泉が各所に湧し生活条件が非常によい。範囲も広く
は人、清冽な泉が各所に湧し生活条件が非常によい。範囲も広く

## 越遺跡 (標高二三〇メートル)

場所で現在は煙草畑等になっている。とは下中沢遺跡の土器と編年が似ているところである。南面したした扇状地に載っている。縄文中期の土器片が散布している。と藤遺跡よりも標高高く、猿戻丘稜と西部の山地の中間に押し出

## 古屋敷遺跡 (標高二二〇メートル)

ある。最近小学生が一角の崩れより土器片が発見され、復元されである。遺物等より見ると縄文中期の下中沢遺跡と類似の場所で除き他に転用されつつあるので、将来破壊される恐れのある場所野菜等が栽培され相当深耕されていることと、東部より土砂を取野菜等の東南方の段丘上にあり、現在はホップ・アスパラ・小巻集落の東南方の段丘上にあり、現在はホップ・アスパラ・

#### ている。

## 小和瀬遺跡 (標高二二〇メートル)

ム建設により湛水して水没しているが、水位が三メートル位下ればも発見され、漁生活を裏づけている。この遺跡は現在只見川のダ深い関係にある。標高も低く、只見川との関係の深い地域で石錘行政的には三島町にあるが、只見川沿岸の遺跡として柳津町と

京国立博物 京国立博物 京国立博物



小和瀬遺跡

館蔵)。

## 塩ノ半在家遺跡 (標高二二〇メートル)

域は二畝位の範囲で、あまり広い場所ではない。表土より約二十 川の侵蝕谷によって分離し現在桐林になっている。土器の散布地 見される。 センチメートル位の深さに包含層がある。雨上り等には石鏃が発 上田段丘の一部で、柳津中学校の敷地と同標高であるが、 銭洗

### 石生前遺跡 (標高二八〇メートル)

が出土している。 編年は縄文中期で立派な火焔式土器(現在福島県文化センター蔵 広い地域である。現在畑地で深耕されるアスパラ・いも類・野菜 等が栽培されているので破壊される恐れが充分あるところである。 郷戸の広い段丘の一角にあり約一へクタールに亘って分布する



塩ノ半在家遺跡

石生前遺跡

が、更に近年校 して実証される 石組等から判断

管工事の際に堅 庭の一部排水土

ている。

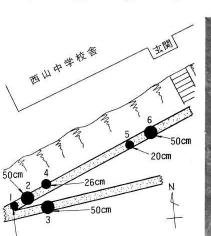
柱跡が発見され 欠住居としての

径23cm

かけてに亘り、

庭地均しの際の 過去において校 と類似している。 小和瀬(晩期)

は出土した石塊、 地域の居住遺跡 小学校に保存さ 遺物は現在西山 れる球状の石塊 加工したと思わ れている。 との





砂子原居平遺跡

## 砂子原居平遺跡 (標高三七〇メートル)

現在西山小学校の校庭になっている。編年は縄文後期、

晩期に

## 胄中阿朤寺遺跡 (標高三九○メートル)

入山沢の大きな扇状地の末端にあり、字上野地区である。 所は阿闘寺跡といわれ、古墳らしい地形も考えられる場所で礎石 この遺跡は昭和四十九年道路拡張工事に於て発見されたもので との場

### 善神平遺跡 (標高三六〇メートル)

際炉址の石組用の石片が出たといわれている。土器片から見て縄 牧沢遠沢寺の北西方小さな段丘の上にあり、 かつて道路拡張の

文中期である。

佐渡畑・入間方と共に柳津・三島地域の特 構が現われた。更に発掘すれば、炉址も必 その一端を削り取られた場所に平たい石塊 も数個発見されている。道路拡張工事の為、 ある遺跡である。 色である敷石住居の共通のものとして価値 ている。縄文中期の編年である。下中沢・ て原況に復帰して保護した。土器片も出土し らず発見される可能性もある。 が発見されたので調査して見ると、敷石遺 破壊を恐れ

## 松ケ下遺跡 (標高五〇〇メートル)

あり、 所にある。附近に丸山と称する小高い丘が 作もあまり深くないので保存されると思わ 柳津町における遺跡としては最も高い場 その東方の地域一帯に土器片が見ら 編年は縄文中期で、現在畑である耕 丸山は古墳らしいところもあり今後



松ヶ下遺跡

の調査の必要がある。



善神平遺跡

地形的特色\_

#### 田 中 遺 跡 (この遺跡は農業構造改善事業の際 「昭和五 年五月

二八日」偶然発見された)

## [場所] 柳津町大字飯谷字田中八五七

この段丘を東に社倉沢、西に巻沢があり共に只見川の下降に促さ れこの段丘を侵蝕して独立した小河岸段丘となっている。 南面し清水に恵まれ、生活舞台には好条件を具備する場所である。 より四十メートルの高さにある中位段丘である。日照時間も長く、 附近は只見川の河岸段丘が標式的に発達し現在の只見川の水面

遺

跡 • 遺 物 0

記

述

## 縄文後期の複式炉

1

ている。又小さい炉址からは無文の単純形の口椽部を有する土器が 複式炉にして中から多数の炭屑が発見された。 径五十センチメートルのセットになった炉址である。 地表より約七十センチメートルの下部に径九十センチメートルと 更に石の側壁は焼け との炉は所謂

手である。 すべては薄 と判断され ら縄文後期 片の紋様か 素が附着し 土器には炭 れる。又との 甕と推測さ これは火種 発見され、 (加曽利B ている。土器 土器の 平 面 义 1 40 断 面 図

月光寺 下野老

中遺跡

の位置

ゟ゙*【*/ を柳津発電所

田

老 制

40

田中遺跡

276.2

## ② 打製石斧、粗製石器、石錘、凹石

で、破片一、二個程度である。
打製石斧の完全なもの一個、破片数個発見された。磨製は極少数

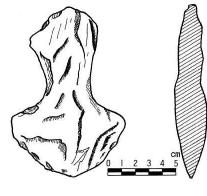
ある。

粗製石器として、ナイフ・矢じり等が土器片に比して案外多いと

とに気づく。附近は只見

見られた。 が発見され漁法の一端が川に近く石錘らしいもの

がうかがわれる。
四石はいづれも中央部

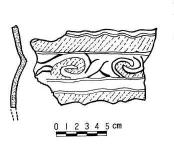


#### )円形平板石

ると、敷石住居址を裏づけるものが考えられる。五、六個(径二十五センチメートル)の平石が散在する状態から見

## 集落地としての推測

上器片の紋様から察するに、縄 文後期この地に人間が住みついた 事実は否定できない。この遺跡全 場を見るに土器ならびに石器片が 域を見るに土器ならびに石器片が

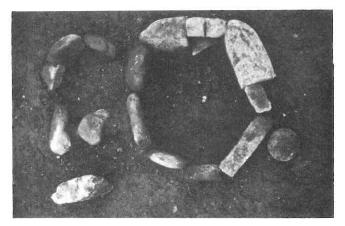


きなかったので、との炉址が屋内のものか、屋外のものかは不明でる。なお大々的にトレンチしないので、柱跡をつきとめることがで

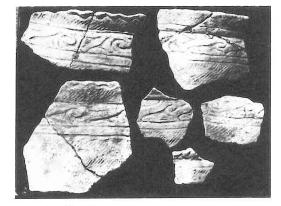




田中遺跡



複 式 炉



土 器 片

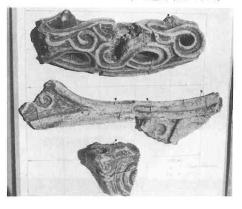




られる。上藤・笠間新八氏宅地の敷石遺構(藤居平遺跡)



牛越遺跡(繩文中期)

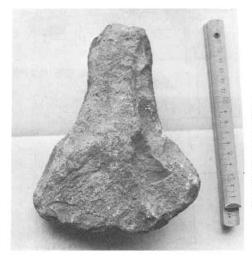


#### ←古屋敷遺跡(小巻)

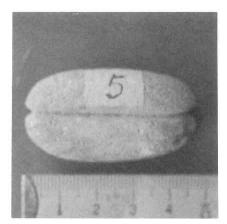
土砂の採取が行われ、遺跡の東部の一角が崩れた部分に出土した甕で、相当大きなもので縄文中期。 ここは板沢の旧扇状地の末端で用水にも恵まれ、出土品から見て重要な遺跡の一つである。

土器片(藤居平·笠間

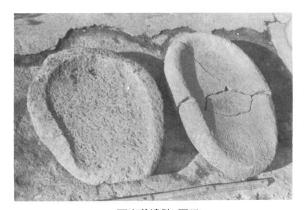




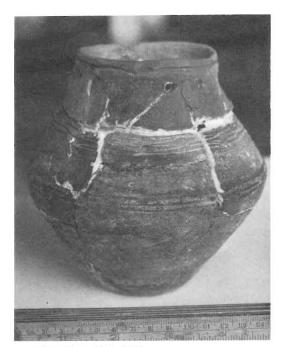
↓打製石斧(根柄巻出土)



小和瀬遺跡·石錘(新井田勝広蔵)



石生前遺跡·石皿



砂子原居平(繩文晚期)



小和瀬遺跡(繩文晩期·高さ30 cm)



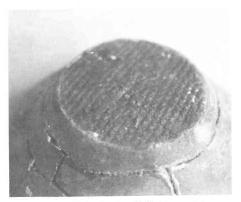
砂子原居平(繩文晚期)



砂子原居平(繩文晩期)



砂子原居平·無文(繩文晚期)



砂子原居平・底部の紋様(繩文晩期)



砂子原居平·磨製石器



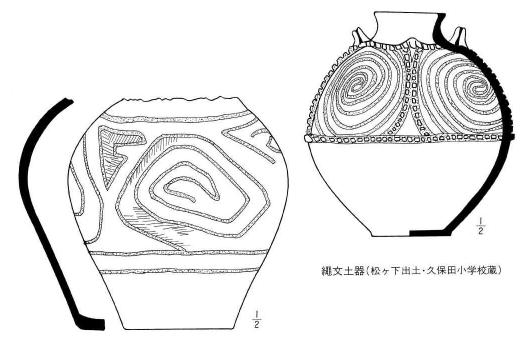
砂子原居平(繩文晩期)



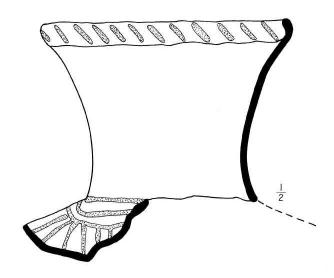
松ヶ下遺跡・縄文(久保田小学校蔵)



久保田中村墓地(古墳?)



弥生土器(胄中出土·小柴吉男氏蔵)



弥生土器(胄中出土·羽賀十市氏蔵)

#### 第2章 歴

#### 第二 節 古 代

#### (--) 伝承・千石太郎

に古墳文化時代をむかえるようになる。 高まったが、やがて貧富の差や支配、被支配の関係を生じて、つい 作を中心とした農業を進んで生活のなかに取り入れて人々の生活は 稲作と金属器を使用する弥生式土器文化時代になると、 人々は稲

われる。 族は、 ŀ 町 の豪族であるかは不明である。 津を支配した一大豪族の墓とされている。 津では、 の大塚山古墳である。 ルで、 青津の亀が森古墳である。 会津では四世期末には壮大な古墳文化を生んでいる。 畿内大和政権よりの派遣者であると考えられるか、 古墳時代の中期、 との二つの古墳を代表として約七十ほどの古墳があるとい 東北地方でももっとも古い古墳といわれ、 五世紀中頃のものと考えられている。 この古墳は大亀甲が全長約一二七メー 会津で他に注目されるのは会津坂下 この古墳に埋葬された豪 会津若松市 会津在来 会

られる程度である。 りみられない。只見川筋では現在のところ、 古墳ではないかと考えられるものが存在するそうだが、 の古墳は、そのほとんどが会津盆地周辺にあって山間地帯にはあま ところで、 これらの古墳はわが柳津町には現存していない。 柳津もその例に入っている。 金山町の糠塚古墳がみ 西山 の松ケ下には 未調査のた 会津

めに判然としない。

に 伝承)。 神軍に対して、 拓したのでそこを善波平といっている(第四章民俗 のあまりに二つの石と化し、善波の命は牧沢に止まってこの地を開 しのぶものとして伝承されている(第四章民俗 に打ち破られ、千石太郎も命を絶えたといい、 つわる千石太郎 さて、 大彦命の一将軍である善波の命が伊佐須美神の神興を奉じてきた ざっとこんな伝承なのである。 西山地区には、 地元の千石太郎の軍が激しく戦ったが、遂には神軍 (仙石太郎、 四道将軍派遣、 仙石五郎) 日本書記巻五崇神天皇の項 高田伊佐須美神社遷座にま の話が古代柳津のすがたを 太郎の両親は悲しみ 第四節伝説 第四節伝説 伝承)。

知朕 不、受,,正 共 波 川 於 + 教 授印 別 年 化 遣東 因 憲 朔 也 秋 授 以 七 九 為将 韶之 海 是 月 今 月 丙 未 既 丙 軍二  $\Box$ 吉 習 戌 礼 戌 若 備 朔 神 主 朔 津 有不受教 己 化 祇 甲 彦 酉 耳 午 遣 災 西 其 害 詔 以大彦 者,乃 拳,兵 道 選 群 皆 群 卿 耗 丹 卿 日 命 然 波 遣 遣 遠 伐之 導、民 道 于 北 荒 主 陸 74 人 之 命 方 等 遣 本 既 武 丹 在 而 淳 命 猶

とある。 また、 古事記中巻崇神天皇の項には

方.所 故 故 其 大 地 遣 毘 謂 相 古 建 命 津 沼 也 河 者 别 与:其 是 随 先 以 命 各 父 而 和 大 平 毘 古 罷 所 行 遣 共 高 之 往 国 遇 志 宇 政 玉 而 尔 相 自 覆 津 奏 東

北進出やその範囲を物語るものである。 発生の由縁を記述しているが、この記述は当時の大和朝廷勢力の東 とあるように、 大彦命、 武淳川別命の父子が会津で遇うという地名

が、

像することができる。そしてこのことばは現在もわたしたちの生活 ている、 方への進出とそれに対抗した地方の在来勢力の争いを示す物語であ の中に、生きて働くことばなのである。 である。この古代柳津の開拓を示す千石太郎の物語は、 わが柳津町に伝わる干石太郎の話も、そのような中央勢力の当地 それは歴史的にみると中央勢力の地方鎮撫を意味しているもの ・千石などの地名をとおして、古代柳津の開拓過程の一端を想 切伏·野沢·砂子原·牧沢(馬置沢)·善波平·博士山 現在に残っ 佩紫

は御神楽嶽より三 南原へと遷座されたと伝えている。 で眺望がすばらしい。 (現在は博士山) はわが柳津町と会津高田町•昭和村との境にある山 伊佐須美神社の遷座もこの千石太郎の話にでてくるが、この神社 御) 頂上にその神座跡があり、 坂山・佩山と遷座されたといわれる。 文化の会津への伝播とみられる 後に明神嶽、 佩山 高田

#### (=)国郡の設置と柳津

伝承である。

東北地方では、 を設けて、 このような中央大和朝廷の勢力進展は、やがて各地方に国造制度 地方の豪族をこれに任命して地方を支配させるようになった。 国に国造、 『国造本紀』に、 県に県主、 村に稲置の称号を有する役を置い 信夫国造、 伊具国造の名がみえる

> 芸国造」と解すべきだとの説もあって存在を明らかにし得ないよう あるが、 阿比闘国造」の誤りであるとして会津国造の存在を肯定するのも なぜか会津の国造の名はみえない。一説には 他方には、 「阿岐閇国造」 は 「阿岐国造」であって、 「阿岐閇国造」は

である。

阿部会津臣の姓を賜っている。 には中央政権の阿部氏一族である丈部氏であろうといわれるが、 が置かれたと推定するのもある(『会津若松史』)。 この会津国造 政治的・文化的な交流を示す存在が確認されたことから、会津国造 なみに神護景雲三年(七六九)には会津郡の人、丈部庭虫ら二人が ただし、最近は、 大塚山古墳発掘によって、中央政権と会津との

ある。 が、 石背国に属した諸郡には会津郡のほかに白河・石背・安積・信夫が て、 養老二年(七一八)には陸奥国より石城石背国の二国を分置した このとき会津は会津一円が会津郡を称して石背国に隷属した。 わずか数年後には再び陸奥国に統合されている。 との時の石城・石背の二国は陸奥国のいわば支国的存在であ

ずいて、 阿部会津臣の姓を賜った丈部庭虫などは、 郡の行政役所である会津郡衙の所在地は今もって不明となっている。 政区域となっている。 として会津を支配したと考えられる。 こうして律令体制の中での会津は陸奥国に属して会津郡という行 やはりこの郡の中に五十戸単位の里 陸奥国の国衙は多賀城に設置されたが、 この会津郡も律令体制にもと 当然にその会津郡衙の長 郷) があって里長が

治めたものと考えられる。

ている。かって古代末期に会津に君臨したという恵日寺が近世まで 所持した「余戸郷印」という銅印は、この会津郡九郷の一つである 古く律令体制の会津郡設置の時期に合致するかどうかは疑問とされ は平安時代の承平五年(九三五)ごろといわれていて、この記録が 余戸の九郷が記録されている。ところがこの『和名抄』の成立年代 会津郡には、伴々・多具・長江・倉精・菱方・大島・屋代・大江・ 余戸郷にちなむものであろうといわれている。 つに『和名抄』と砂子原温泉の発見がある。『和名抄』によると では、当時の柳津はどんなふうであったろうか。その手がかりの

たのだろうか。これについて、『福島県史』では、 このように、会津郡九郷と柳津方部とはどのように結びついてい

賀川下流の西会津町に当るか」 「。余戸郷、他郡の余戸と同じく辺地に当る。只見川流域か、 [30]

とあり、『金山町史』には、

扱った端村のことをいう。余目とあるのも同じである。会津郡の 制をとった時に、五十戸に満たなくとも便宜一里(一郷)として 余戸郷の地としては、河沼郡柳津町方面と推定される。」 『余戸』は『あまるへ』とよみ、古代で五十戸一里(一郷)

いうのが、 としている。このように柳津町方部は余戸郷に属していたらしいと 『会津正統記』という著書には、 大方の推察となっている。 柳津町としては千石太郎

> に西山地区の砂子原温泉群が発見されたことである。この書には、 の話についで、古い時代のことが記されている。養老元年(七一七) 後に五畳敷と改む。」 の川端より温泉湧出る。 人皇四十四代元正天皇養老元年丁巳 号,本湯, 後に下の湯と改む。中丸邑を 会津大沼郡金山谷中丸邑

と記されている。なお、 「砂子原上ノ湯(神ノ湯)に同元正天皇養老元年丁巳

云。 郡砂子原邑小塩沢より温泉湧出づ。名,養 老 湯, 後に上ノ湯と 会津大沼

漆を植えさせたが、会津では始めてこの時に植えたといわれている 宝年間(七〇一~七〇三)に朝廷では天下の公民に園地を給して桑、 て、集落や人口が多くなってきたことを意味している。例えば、大 津郡となったということは、それだけに会津地方の開発が進んでき 仁天皇宝亀元年に発見されて宝亀湯と名づけられたといわれる。 けられたというのである。三島町の早戸温泉はこれよりおくれて光 に発見されたとある。上ノ湯は年号養老にちなんで養老の湯と名づ のために三世 諸国にそば、麦などの栽培を奨励している。 ほどであるし、養老六年(七二二)には、懇田百万町歩を計画し、 とも記されている。この書によると下の湯、上ノ湯ともに養老元年 東北地方に及ぶなかで、 養老二年(七一八)に石城、石背の二国がおかれて会津地方が会 一身の法を定めている。 会津地方は比較的早くからこれらの畿内政 畿内のこのような律令政治が また翌年には懇田開発

策に同化していき、集落形成を進めたと考えられる。

基盤を形成したと考えてよいであろう。

基盤を形成したと考えてよいであろう。

基盤を形成したと考えてよいであろう。

基盤を形成したと考えてよいであろう。

はお、『和名抄』によると、

であろう。 とあり、 いう郡名の起因も、 十二世はじめと考える説もある(『金山町史』)。 大沼神社裏大沼説 「白河之良加 大沼、 ただこの大沼郡と河沼郡の成立年代を十世紀ではなく、 河沼の二郡の分郡を記している。白河は会津の誤り (『新編会津風土記』)とがある。 国 沼沢沼説(『大沼郡誌』)、会津高田町竹原の 分為高 野 郡 分為大 また、大沼郡と 沼 河 沼二

### 三 古寺社の創建

式 六人に及んだといわれる。 十一年に遷宮式を行い、宮司阿部宿弥能基ほか神主、 田 て信仰を深めた。 社は伊弉諾尊、 社・蚕養国神社・磐椅神社の三社がこれにのっている。 [南原に宮殿・拝殿・廻廊・四門・華表など残らず造営して、 とれら律令体制の中で、会津の文化はしだいに高まった。 には全国の著名な神社を記載しているが、会津では伊佐須美神 伊弉冉尊を祭祀して当地方では「むすびの神」とし 『会津温故拾要』によると、欽明天皇十九年に高 この社は「奥州二の宮」の称ある社で「続 検校など三十 伊佐須美神 『延喜 同

> あった。 五位下」とあって、無位より一躍従五位下に格付されたほどである。 後には従四位下の磐椅神社を追い抜き、名実ともに会津の大社となるきっかけがここにみられる。 蚕養国神社は養蚕の神として信仰が るきっかけがここにみられる。 蚕養国神社は養蚕の神として信仰が るきっかけがここにみられる。 蚕養国神社は養蚕の神として信仰が るきっかけがここにみられる。 蚕養国神社は養蚕の神として信仰が

実録』に、
一○年代)に磐梯山の頂上に祀られたといわれるこの社は、『文徳会津を守護する神として古くからの信仰がここにある。和銅年中(七として尊崇するものであり、いわゆる地主神へのあらわれである。磐椅神社は、「会津嶺」すなわち磐梯そのものを会津の父なる山

上位の格を有していたが、後に会津国守神の首座を伊佐須美神社にとあって、斉衡二年(八五五)のこの時期には伊佐須美神社よりも「加"陸 奥 国 石 椅 神 従 四 位 下.」

譲るようになる。

本尊として安置したといわれる。
本尊として安置したといわれる。後に十一面観世音像を
道)上人によって大沼郡雀林に建てられた。後に十一面観世音像を
道)上人によって大沼郡雀林に建てられた。後に十一面観世音像を
道)上人によって大沼郡雀林に建てられた。後に十一面観世音像を

天平元年には、僧行基が耶麻郡松野村に茲福山千光寺を建てて弥陀和尚、役小角の二人が飯豊山に登山して祠を建てたとの伝承もある。その他に主要な伝えとして、白雉三年(六五二)に智道(知道)

三尊を安置した。その北三森山には西蓮寺を建てて奥の院として、

僧戸三十六坊を列したといわれている。

注目すべきは、推古天皇六年(五九八)に建立されたといわれる。 四王、越王、高志王、腰王ともなり、奥越羽の間に多く存在し、古 志族の祭った神、アキタノウラ神である。それが古志族の日本化 とともに、古志の君の祖、大彦命を祀るようになったと伝えている とともに、古志の君の祖、大彦命を祀るようになったと伝えている は、胡 四王、越王、高志王、腰王ともなり、奥越羽の間に多く存在し、古 く会津では阿賀川沿いに多くみられたといわれる。

あい、やがては会津独得の文化を生じたものと考えられる。生活の向上のなかで、東西両文化の流入が長い年月をうけて融合してのように会津の古社、古寺を創建した文化は、古代会津の民衆

## 四 福満虚空蔵と円蔵寺の創建

それでこの史実はなかったとするのが通説であるが、 蔵寺は、 はもちろんのこと、越後・出羽の国々、 弘法大師 みると会津には徳一を開基とする寺院が数多くみられ、 る東北屈指の巨刹である 主等の深い信仰を有していた。また、 空海の会津入りは俗説で当時九州大宰府近くの観世音寺にいた。 わが柳津町の福満虚空蔵菩薩は、 大同二年(八〇二)僧徳一によって開基されたと寺伝にあ (空海) の彫刻になるものと伝えていて、古くより地方民 (第七章観光 日本三大虚空蔵の一つであって、 この虚空蔵尊のある霊巌山円 戦国期の諸将、 第一節虚空蔵信仰と観光)。 徳一につい 会津歴代藩 恵日寺で晩

年を終えたともいわれる徳一の足跡は史上事実とされている。

どの諸寺院がこれにあたっている。 村御坂山大高寺及び金岩山金秀院、 如法寺、 筆頭にして、 大沼郡仁王寺村牛伏山仁王寺、 会津における徳 霊巌山円蔵寺、 耶麻郡岩崎荘山入村慈眼寺、 稲河荘勝常村に瑠璃光山勝常寺、 一開基の寺院と伝えるものには、 稲河荘大野村寿命山光泉寺、 会津郡御山村観音堂、 大沼郡入間方村横雲山高野寺な 小川庄田沢村高明山東善寺、 稲河荘楊津村 同野沢村の金剛 磐梯山恵日寺を 大沼郡大石田

されたとするが、『会津旧事雑考』にも、大同二年の頃に、わが柳津町が誇る名刹霊巌山円蔵寺はこの名僧徳一によって開基

彫 地 工 伝 匠 往 也 Ħ 昔 地 云 徳一 楊 多 大 建 故 野 於 名 邑 稲 云 者 集』材 Ш 荘 且 楊 木 虚 津 地 空 円 蔵 云 蔵 尊 寺 像 安 於 者 小 空 虚 柳 海 空 津 師 蔵 者 之 置 所 此

と記述されている。また、同書はさらに、

云 役 各 蔵 伝 夫之 潤 矣 Н る 時 徳 暑 矣 苦 欲 建 営 既 於 坐干 於 楊 稲 楊 津 Ш 六 津 営 庄 本 堂 成 大 樹 宇 後 野 以 下而 伐 邑 材 被 光 六 加 泉 本 持 此 寺 樹 也 時 天 刻 安 極 於 頓 於 六 冷 暑 六 地 泉 地 衰 蔵 涌

てれによると、円蔵寺創建は徳一となっている。『円蔵寺大縁起』と、大野の光泉寺建立、六地蔵縁起についても記述している。

とされた。

であり、 「柳津桜本坊由緒書」 (享保十九年、一七三四)

州 会 津 縣 蜷 川 之 荘 柳 津 者 仁·人 王·皇 Ŧī. +

師 所,草 創 也

城

天 奥

皇

御

宇

大

同

\_

年

+

亥

Ξ

月

=

法

相

徳

大

代

平

と記述し徳一 開基としている。

ところが、元禄十五年(一七〇二) に円蔵寺住職泰岳和尚が著し

た 『円蔵禅寺略記』には、

而 未 或 詳 霊  $\Box$ 嵯 巌 安 置 Ш 峨 円 天 虚 皇 空 蔵 弘 褝 蔵 寺 仁 菩 Ξ 薩 大 同 年 之 \_ 尊 慈 年 覚 像 者 大 法 師 弘 相 建之 法 宗 徳 大 師 \_ 大 所 歳 華 彫 師 遷 刻 開 謝 也 基

ことにもふれている。 と記述されていて、 開基は徳一としながらも、 慈覚大師の説がある

#### (五) 湯明神・胃中滝・ 阿弥陀堂

塩沢養老の湯(上の湯)とに湯明神を祀ったといわれる。 寛仁二年(一〇一八)に中丸邑 (五畳敷)の本湯と、砂子原邑小

に山が崩れて滝となり、高さ六丈余り、「其の下深きこと限り無し」 また、胃中の滝は長承三年(一一三四) には中ノ川大洪水のため

れたといわれる。 さらに、 仁平元年 〇 五 三 には大成沢邑に阿弥陀堂が建立さ

#### (六) 藤・猿戻城

10

たのがこの猿戻城であり、 重範が会津進出に成功して、蜷川荘に八館を築いたさいに主城とし いろな説がある。 九号線のすぐそばの高台に位置している。 びつきも深まった城氏が、 擡頭の波にのった越後城氏の勢力が伸展し、 を疑問とするのもある。また、 の会津進出は挫折したというが 宗顕と片門上野原で合戦したが、重範は敗れて自害したといい城氏 日寺勢力と争って、 れるのが城長茂である。 して主城としたという説がある。 七館には家臣を住まわせたというものである。後に重範は磐梯山恵 柳津町藤には旧跡槻森山猿戻城がある。 その一つは永延二年(九八八)に越後国の城四郎 正曆二年 重範自身はこの主城猿戻城に住み、 会津二十八館を築き、 (九九一)には恵日寺代官斎藤佐渡守 他の説には、 (下巻集落誌 との時、 この猿戻城構築にはいろ 俗称越後街道、 猿戻城を修築したとい 会津恵日寺勢力との結 十二世紀に至って平氏 藤の項参照)、 藤の猿戻城を修築 現国道四 これ 他

3 の兵四万余騎をつれて木曽義仲討伐に向ったが、信州横田河原での 戦に敗れて越後に逃げ帰っている。これは史実として明らかであ との城長茂は寿永元年(一一八二)九月、 (『平家物語』 「玉葉」 『源平盛衰記』)。 越後、 出羽、 会津四郡

たことは歴然としている。 われている。 いずれにせよ、藤の槻森山(俗称寺山)の高台は城氏の居館跡と 現在、 土塁の形も残存していて、 また、藤には斎藤宗顕と城重範と伝える かって居館であっ

墓碑がみられ、 といわれている。 系図も所蔵されている。 斎藤宗顕の子孫が現在の斎藤淳氏宅であってその家 藤の笠間家は重範の家臣加佐間七郎の子孫

勢力の荘園化など、いわゆる荘園経済体制が伸展した時期と考えら 小農民の発生による地方豪族の崩壊と成長、それらを基にした寺社 城氏が会津進出をはかり藤に猿戻城を築いたといわれる平安時代 後期は、 律令体制が崩壊し、 代わって中央貴族の荘園化、 大

は耶麻郡半在家に置かれて会津国府を称し、藤原富士麻呂従三位友 荘園を形成した。銭守長者の名を今に伝えている大沼郡西方村の藤 初期には会津 原保祐は近村十八か村を占有する一小荘園を形成していたという。 らはそれぞれに自己の土地占有の開拓に力を入れて、おのずと一小 の会津郡地頭石部少将光秀、 なる。天安二年(八五六) 進展は、平安中、後期にわたって、会津の各方部にみられるように 有地である荘園が会津にもみられるようになってきた。平安時代の などの存在がそれであり、 って多くの寺社建立がなされている。これら小地主的豪族の発生、 既に平安初期にも会津では小さな地方豪族ともいうべき人々によ 方、律令体制の崩壊していくなかで、中央貴族や寺院などの私 貞元二年(九七六)大沼郡西方村稲荷原の銭守長者藤原保祐 行政の中心的役所が三つ置かれてあったといわれ、一 の耶麻郡の藤原義円、貞観七年(八六五 いわば武士出現の芽生えを意味し、 天徳二年(九五八)小川荘津川領主渡

> 島か)、三は大沼郡坂下にあり、これを会津大内と称したといわれ 則が官司として住したといわれる。二は南山長江荘の郷村に 河沼郡会津坂下町か、会津坂下町には政所の地名がある) (大沼郡坂下は現在の大沼郡金山町大字中川字板下か、または現 **(** 今の 田

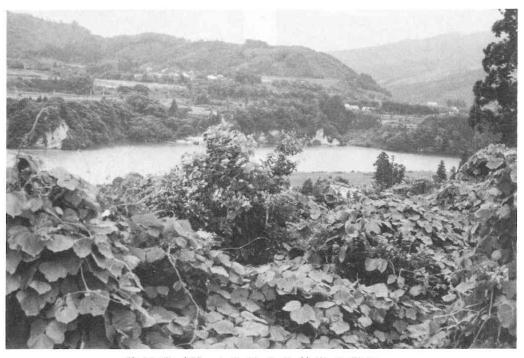
る

して、 る。 田町の領家もこの荘園内といわれている。また、長江荘は弘仁十二年 荘園として成立したもので、現在の河沼郡西部がこれにあたり、 共 うになり、 れるものと考えられる。後に関白忠実、 が柳津町をはじめ、会津坂下町、西会津町などがこの荘園内に含ま ようになる。 藤原氏の所領として成立したが、後に勧学院に寄進されたものであ (八二一) 藤原冬嗣によって建立された勧学院の荘園で、はじめは これらの行政府にもしだいに土地の私有化、 小川荘、 現在の下郷町、 鎌倉時代の建長年間には近衛家の請所となっている。 蜷川荘、長江荘をはじめとして、 月輪荘、更科荘などの荘園名がしだいに登場してくる 当時の蜷川荘は三条天皇皇女儇子内親王(冷泉宮) 田島町のあたりがこれにあたるであろうか。 即ち藤原氏への荘園に転移 門田荘、 荘園の発生をみるよ 加納荘、 会津高 の わ

の信仰、 の寺院、 文化の であろう。伊佐須美神社、 してわが町の円蔵寺等に代表されるこれらの会津寺社勢力は、 ところで重要なことは、奈良時代から平安時代初、 一体化が政治的にも推進され、 神社創建にともなうそれら寺社勢力の増強、 帰依、 それによる土地、 磐椅神社、 財物の寄進等の社会的、 恵日寺、 かつ大農民、 恵隆寺、 小豪族の寺社 荘園化の過程 中期にかけて 勝常寺、 経済的背 そ



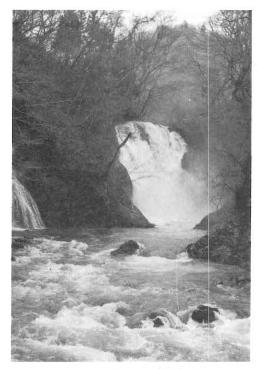
猿 戻 城 (藤)



猿戻城(藤)より只見川対岸を望む



史伝・唱崎古戦場址碑(南会津郡只見町)



長 承 3 年 (1134) 胄中滝できる



史 伝 · 唱 崎 決 戦 場 (南会津郡只見町)

ろう。の寺社勢力の頂点が会津では恵日寺勢力としてあらわれたものであの寺社勢力の頂点が会津では恵日寺勢力としてあらわれたものであ背景の強化によって、徐々に伸長していったものと考えられる。そ

十一世紀ごろより地方の豪族をして土地の管理事務にあたらせたら 七~一一八一)にはその繁栄ぶりは絶頂を極めるようになった。 頂期には十三名もの恵日寺代官がおかれたという。 意か)を支配した寺代官であったといわれている。 重範と争ったといわれる河沼郡夏井村の住人、斎藤佐渡守宗顕など のように会津四郡に勢威を張った恵日寺は、その勢力伸長期の十、 の高権者として、全会津を膝下に置いたとするのがそれである。 伝にいう、寺領十八万石、寺僧三百人、子院三千八百坊、会津四郡 八五)ごろより繁栄を来して、平安後期末、治承、養和年間(一一七 もその一人であったと考えられるが、 平安初期に創建された磐梯山恵日寺は、平安中期応徳二年 これが 恵日寺代官であって、 古くは正暦二年(九九一)に城 彼は夏井十八郷(十八か村の 治承、 養和の絶  $\frac{1}{0}$ 所 ح

まれていたかもしれない。

このころのわが柳津町には円蔵寺、三島町には大高寺、会津坂下には東の恵日寺と並び称されたという恵隆寺等が存在して、当地町には東の恵日寺と並び称されたという恵隆寺等が存在して、当地町には東の恵日寺と並び称されたという恵隆寺等が存在して、当地町には東の恵日寺と並び称されたという恵隆寺等が存在して、当地町には東の恵日寺と並び称されたという恵隆寺等が存在して、当地町には東の恵日寺と並び称されたという恵隆寺等が存在して、当地町には東のころのわが柳津町には円蔵寺、三島町には大高寺、会津坂下

にこの時期に確立されていて、恵日寺はあるいは城氏の風下に立 になっていった。こうして城氏の庇護による恵日寺の勢力は会津に 密接な関係を結ぶに至っている。また、この時期に助永の弟乗丹坊 蒲原郡小川庄七十五か村の寄進を恵日寺になしているなど、 恵日寺勢力と争ったという説はさておいても、 るだろう。 なるのは越後の城氏と恵日寺との連携、 諸豪族の協力があったことは疑いないが、この時期に大きな素因と ていたかもしれない。 元年(一一八二)城長茂が会津四郡の兵を徴した政治的背景は、 て強力な基盤を有することになったというべきであろう。 於て絶頂をきわめたが、 は恵日寺僧徒の綱となり、 一大勢力となり、承安二年(一一七二)にはその城助永が越後国東 五九)以後の城氏は平氏全盛の波にのって、 治承、 養和のとろの恵日寺繁栄の背景には会津における大農民 前述の城重範が永延、正暦のころに会津進出をめざして 同時にそれは越後城氏の勢力が会津にお 城氏と恵日寺との関係は一層緊密なも 結託が深められたことにあ 越後、 保元、 平治の乱(一 出羽における 後に寿 両者は 既

誌 藤参照)。 あ利点としても、じゅう分にうなずかれるものがある(下巻 集落の利点としても、じゅう分にうなずかれるものがある(下巻 集落地としてこの藤においたのは、越後街道における交通上の要点守勢ものであろう。会津二十八館の所伝はともかくとして、猿戻城を主とのような政治的背景のなかで、藤の槻森山猿戻城は構築された

信州横田河原の一戦に敗れ、乗丹坊をも討たれた越後無双の勇士

長茂が、

して(『平家物語』)。 「我身手負ひ、辛き命生きつつ、河に伝うて越後国へ引退」

という、 あるかはさだかでない。 礫 助 然 間 元之間 藍津の城とは恵日寺か、 本国在庁 欲引 篭 官 藍 人 巳 はたまたこの猿戻城をさすもので 津 下 之城,之処……」(玉葉) 為、遂,宿 意 欲、凌

## 第三節 中 世

## 芦名・山内氏の支配

 声永四年(一一八五)三月に平家を滅亡させた源頼朝は、東北に 表永四年(一一八五)三月に平家を滅亡させた源頼朝は、東北に 東永四年(一一八五)三月に平家を滅亡させた源頼朝は、東北に 大工を築いた長茂が、木曽義仲との横田河原の合戦にあえなく敗れて会津に籠ろうとしたが、藤原秀衡にさえぎられてそれを達する たとができず、ついに頼朝に降伏した。藤原征討のさいに長茂は梶原景時の周旋によってその一員に加えられたのである。しかし、源原景時の周旋によってその一員に加えられたのである。しかし、源原景時の周旋によってその一員に加えられたのである。しかし、源原子時の周旋によってその一員に加えられたのである。しかし、源原景時の周旋によってその一員に加えられたのである。しかし、源原子時の周旋によってその一員に加えられたのである。しかし、源原子時の周旋によってその一員に加えられたのである。しかし、源原子時の周旋によってその一員に加えられたのである。しかし、源に、東北に

また、(『会津四家合全』)には、

者であった。田の四氏を通称会津四家といい、これら四家が中世期の会津の支配田の四氏を通称会津四家といい、これら四家が中世期の会津の支配とある。佐原氏は後に芦名を称するが、芦名・山ノ内・長沼・河原

北朝時代・室町時代・戦国時代) 所領となり、その支配下に置かれたわけで、おおむね旧柳津町方部 金山荘とか近世の金山郷、 和村とそれに柳津町のうち旧西山村がこれにはいるものと考えられ 在の只見町方部にあたる。金山谷とは、 が当時の支配のかたちであった。 は芦名氏、旧西山村方部は山ノ内氏の所領として二分されていたの したがって、十三世紀から十六世紀に至る中世期(鎌倉時代・ 川口郷、 山ノ内氏が支配した伊北郷とは現 の柳津町は、 野尻郷と称せられた地域範囲で 現在の三島町・金山町・昭 芦名、 山 ノ内両氏 南

使用されたのかもしれない。が、只見川にそう谷間の村々をこのように称したのはこの時代からある。金山谷という称はいつのころから起ったものか明らかでない

末期には集落の支配者もまま変わるようになっている。 土の安全または拡張をめぐって利害関係が生じ、しばしば紛争を起土の安全または拡張をめぐって利害関係が生じ、しばしば紛争を起きないく、中世の約四百年間の柳津の支配者はこの芦名氏と山ノ

### 二 砂子原山内氏

をとっていたものであろう。『塔寺長帳』には、のころに下向したと考えられる。それまではいわゆる「遥任」の形年間に直ちに会津に下向したのではなく、ほぼ南北朝時代に入って源頼朝によって会津の所領を与えられた芦名・山内の両氏は文治

「応永廿五年正月、新宮陣音信山内」

た 下向し、 応永十年 俊が会津に移住し金山谷にはいって館を構えた(「昭和村の歴史」)。 をさしているが、 廿五年(一四一八)正月には新宮氏と芦名氏との戦いがあったとき とあって室町時代になって当時の記録に山内氏が初登場する。 それ以前には既に山内一族である山内俊行が文和三年(一三五 に野尻牛首 大沼郡を拝領すと伝える(『金山町史』)としている。ま (丸山) .との時期より以前の応永九年(一四〇三) 山内通俊、 城を築き、後代文明五年(一四七三)に同 篠河管領足利満直に従って奥州に 山内通 応 永

> て横田より分地の二十貫文を領するようになっている。 五三一)に山内俊範は桧原内山俊景の跡を継いで五十貫文を山内俊また、永禄元年(一五五八)には横田領より滝谷二十貫文を山内俊また、永禄元年(一五五八)には横田領より滝谷二十貫文を山内俊また、永禄元年(一五五八)には横田領より滝谷二十貫文を山内俊城を修築したといわれる。さらに十六世紀にはいると、享禄四年(一城を修築したといわれる。さらに十六世紀にはいると、享禄四年(一城を修築したといわれる。さらに十六世紀にはいると、享禄四年(一城を修築したといわれる。

ら 盛はさらに至徳元年(一三八四) るほどに会津盆地内を中心としてその勢力を確立していった。 田入館(応永九年「一四〇三」) 山内俊行の野尻牛首城築城(文和三年「一三五四」)、 会津若松市神指町)に居住したのは康暦元年(一三七九)であり (黒川後の鶴が城) と号した。 方、 芦名氏のほうをみると、 芦名直盛が会津に下向し、幕内(現 新宮氏、猪苗代氏などと交戦して、 その後、 とほぼ同時期にあたっている。 には小高木に館をつくり東黒川 しだいに会津守護職を称 芦名氏は十五世紀の初頭 山内通俊の横 直

猪俣氏の存在もみられる。すのは砂子原山内氏であろう。他に中野田崎氏、丸山斎藤氏、細越の動きがみられたであろうか、柳津で比較的明確な武士の存在を示の動きがみられたであろうか、柳津で比較的明確な武士の存在を示とのような中世の武士団の動きのなかで、柳津ではどんな武士団

の長尾氏は弟上杉房顕を立て管領とし、ために房顕は鎌倉に入った氏、結城成朝が上杉憲忠を誘殺した事件が発生した。この時に越後砂子原山内氏は鎌倉から来ている。享徳三年(一四五四)足利成

史

ح といわれる。 名氏を頼りとした。 る。山内信憲は家臣窪田越中の手によって上野国より会津に来り芦 鎌倉の出で上杉氏の家系であり、 れが砂子原山内氏の祖となっている。このように砂子原山内氏は この山内の乱のとき上杉房顕の子が山内信憲であり、 横田山ノ内氏の家系とは異ってい

としている。 ては横田山ノ内氏と友好関係を結び、同領主山内俊清の六女明月子 文、五畳敷五貫文、黒沢五貫文、間方七貫文、浅岐六貫文、 または、 来住したのがその始まりである。 築いてもいる(『砂子原山内家系図』)。 十五貫文、上滝原村五貫文、 を妻としている。 村である(合計六十貫文となり不審)。信憲の孫信俊の代に至って 七十貫文を領するようになる。山内信憲が領したのは、砂子原五貫 享徳三年(一四五四)または、 胄中九貫文、 康正二年とすれば盛氏は誤りである) また、同年に信俊は黒沢村、 そのため、 猿屋敷二貫文、蛙田九貫文、小塩十貫文の十か 天文元年(一五三二)には小川庄の内 橋立村五貫文を俊清より分地され領地 後、 康正二年(一四五六)に砂子原に 山内氏は芦名盛詮(享徳三年 中丸村(五畳敷) の旗下に属して永楽 に館を 麻岐三

館は壱盃館と称されたが、 が砂子原来住の折供奉したのが、 は黒沢和泉某と云者の住した館ということになる。 この黒沢の館が『新編会津風土記』にある伊藤駿河某と云者また 釈迦之像、 薬師之像の五体である。 『芦名故臣録』にもこのことはみえてい 春日大明神、 信憲自身の砂子原の居 稲荷大明神、 山内信憲 十一面

> いう中世末期、 子原山内氏が、一方では横田山ノ内氏と友好関係を確立していると はじめ、芦名氏の庇護のもとに十か村、永楽七十貫文を有した砂 いわゆる戦国時代の行動は、当時の地方在住の小武

## 山内氏の柳津進出

士団の立場がどんなものであったかを示している。

川・中屋敷・松坂(以上大沼郡)・中野・長倉 文にすぎなかったが、この合戦で押領した村落は、 前の領有村落は、漆峠・大成沢・沢中遅越渡の五か村、 を奪い、芦名氏支配の十三か村を押領したといわれる。 この襲撃によって俊政・俊範らは河内を始め十三人を討ち取って城 預りで城代井上河内が守った滝谷の岩谷城を襲撃したものである。 山ノ内氏の一族である山内俊政・俊範らが、芦名氏家老松本図書の 三か村、 八木沢)中丸(五畳敷)・大嶺・松が下・田代・猿倉・牧沢・逆瀬 例えば永禄元年(一五五八) 永楽八十貫文に及んでいる の岩谷城合戦がある。これは、 (以上河沼郡) 滝谷・上村 俊政の押領 永楽二十貫

としたものであるから、 かりを買い、 (一三九○) 芦名の家臣井上河内が築城してこの地方の支配の拠点 に入質中の沼沢政清のとりなしで、 もともと、この方部は芦名氏の領有であり、滝谷岩谷城は明徳元年 盛氏は直ちにこれを討とうとした。ところが、 この俊政の岩谷城奪取事件は芦名盛氏のい 俊政・俊範は 当時黒

自今以後兄弟共旗下ニ属シ、 何方ニモ軍用可、働成テ……」 る。

るようになった(『異本塔寺長帳』『会津四家合全』)。 領地八十貫文十三か村の領有をみとめられ、岩谷城をその居城とす という盟約を結び、この事件は取り止んでいる。 しかも、俊政は押

没

文の地を、 文を領有するようになっている。 方、俊範もまた桧原の地頭内山俊景の名跡を継いで永楽五十貫 同時に横田山ノ内家より分地、 永楽二十貫文、計七十貫

た。 俊範の後継ぎによって、横田山ノ内系の進出がみられることになっ 領有する村落は芦名氏勢力の範囲内にあったと考えられるが、この もともと、桧原の地頭内山俊景は芦名氏の家臣であるから、 俊範が領有する村名には、 その

がみられる(『会津四家合全』)。 持寄・塩野・金杉・猪鼻・黒滝・南柳津(小柳津の誤りか、また 郡)小ノ川五ケ所(今和泉・下邑・林崎・中崎・八幡崎)・丸山 柳津の南半分か)・宇内・和泉・中地・小巻・阿久津(現安久津)」 六ケ所(合戸・古屋敷・原・花田・石生・石上)・出倉・大野・ 一桧野原幷小疇・鷹巣・川井・中田根岸・蕪中・鳥屋(以上大沼

地されて、 功があったために旧地を含めて七十貫文の地を領したといわれるし、 みられる。 してその領地を奪っている。信重の弟重勝(天正六年「一五七八」 天文二十一年 また、天文十四年(一五四五)に大沼郡沼沢領から三十貫文を分 例えば氏信の長子信重は芦名盛氏に従い、岩城合戦に軍 同郡西方に鴫が城を築いた山内氏信の家系の勢力増大も (一五五一) には御坂山大高寺 (現三島町)を攻め滅

> 重の代に軍功によって与えられたものといわれる。大久保は麻生の 津町に含まれる計八か村の領地は元来芦名家の所領であったが、 のうち、 下川原・早戸・滝原・高倉・高尾・中野・大石田・名入・飯岡・小 近くの旧集落をさしている。 藁打」(『会津四家合全』『山ノ内事蹟考』)がこれにあたる。 黒沢・船窪・郡内(以上河沼郡)・山ノ内・山垣(小牛森)・大魚 山・高清水(以上大沼郡)・麻生・大久保・中山・柴倉・小杉山 の領地はこれらを合計して永楽百貫文といわれ、「西方・沼田 河沼郡に属する麻生・大久保・中山・柴倉などの現在の柳 信

ものと考えられる。 友好関係を結んだのも、 元来、芦名氏の旗下に属していた砂子原山内氏が横田山ノ内氏と とのような戦国時代の末期の情勢があった

推定できる。『会津四家合全』には次のように記録されている。 万一千石の領地高(『三島町史』)が横田山 貫文があり、都合永楽一千八拾貫文、近世期の石高に換算すると二 た領地は永楽合八百八十貫文であるが、これに隣接地の押領地二百 天正末期、横田山ノ内氏が全盛を極めたころのこの一族が支配し 山ノ内下野守季基領地合八百八十貫文 ノ内氏勝代の支配高と

此分地幷押領之事

四百十貫文 横田山ノ内氏勝

八十貫文 野尻山ノ内兵庫頭

百五十貫文

沼沢領

内百二十貫文 沼沢山ノ内政重

三十貫文 西方山ノ内重勝

外七十貫文押領 /都合百貫文領ス

一十貫文 滝谷山ノ内俊政

十貫文 桧野原山ノ内俊範外八十貫文押領グ都合百貫文領ス

外五十貫文譲り地都合七十貫文領ス

一百貫文 川口領

内三十貫文 布沢 二十貫文 本名

三十貫文 宮崎 二十貫文 中井

百貫文 川口山ノ内俊満

多くはこれらの城館を地形要害の地に築いている。 は平地に居住していて、いざ戦となると山城の館に移住するために の武士団居住地跡を示すなごりといえる。これらの在村武士は通常 倉・山城などの地名を残しているのは、これら中世末期、戦国時代 た。 黒沢・漆峠・中屋敷・合戸丸山・中野・小ノ川などに城館が築かれ のうち柳津町分には、軽井沢・田代・牧沢・遅越渡・沢中・砂子原 和泉田川原崎・布沢)、 があり、 玉縄城・沼沢丸山城・西方鴫が城・滝谷岩谷城・桧原丸山城の七城 また、 現在とれらの集落に、館・館山・焼館・館跡・的場・馬場・矢 山ノ内七騎党持城として、横田中丸城・野尻牛首城・川口 他に固城六ケ所(大塩中山・簗取窪・只見水窪・峠杉山・ 持柵 (館)、 五十一か所に及んでいる。と

## 芦名氏の山ノ内攻撃

(四)

ノ内越中を討っている。『塔寺長帳』の同年の記事に、はなかった。既に長禄三年(一四五九)に芦名盛詮のときに横田山しかし、芦名氏は一方的に山ノ内氏の領内侵攻を許していたので

なく候。」 (同年山内越中殿、御屋形さまの御意にちがわれ候て、十二月十「同年山内越中殿、御屋形さまの具足をめし、法花堂に御陣をめされ、惣勢城を三之の上、山内越中殿時のいせいをもって、塔寺両方へししかきをたてられ候間、衆徒神宮同心罷出ゆい候かようなる御ばつに候や、でられ候間、衆徒神宮同心罷出ゆい候かようなる御ばつに候や、 古に越中在所へよせられ候。我所をばとられ、中野城へいられ候。日に越中在所へよせられ候。我所をばとられ、中野城へいられ候。

いわれる(『三島町史』)。

いわれる(『三島町史』)。

な、これをみると一時は塔寺八幡神社勢力をして山ノ内氏の勢とある、これをみると一時は塔寺八幡神社勢力をして山ノ内氏の勢とある、これをみると一時は塔寺八幡神社勢力をして山ノ内氏の勢とある、これをみると一時は塔寺八幡神社勢力をして山ノ内氏の勢とある、これをみると一時は塔寺八幡神社勢力をして山ノ内氏の勢

同意して、ひそかに芦名氏討伐の計画を立てたが、かえって盛氏らわれている。世にいう横田くずれである。舜通は越後の長尾為景と年(一五四三)山ノ内舜通が芦名盛氏と戦って敗れたときからとい横田山ノ内氏が芦名氏に完全に属するようになったのは天文十二

は敵に制せらるべし。」 とした横田山ノ内勢は、丸城に攻め向った。これで、「兵は先んずる時敵を制す、後るゝ時の知るところとなり、舜道討伐の盛氏の軍は疾風迅雷の如く横田中

一族家来ばかりを召集め、引連て越後の長尾為景のもとに落ける」角俄急の事なるに軍勢催促も間に合ず、術計尽果、取物も取得ず、「横田にては隠謀企つといへども、未だ軍兵の手配もなく―― 兎

### (『山内事跡考』)

応芦名氏の支配下にあったことを物語っている。 応芦名氏の支配下にあったことを物語っている。 応芦名氏の支配下にあったことを物語っている。 応芦名氏の支配下にあったことを物語っている。 をとになってしまった。こうして横田山ノ内氏は一応芦名氏に臣での礼をとることとなったが、単なる一家臣ではなく、いわゆる客、下の礼をとることとなったが、単なる一家臣ではなく、いわゆる客、での礼をとることとなったが、単なる一家臣ではなく、いわゆる客、で声名氏支配の滝谷岩谷城を攻略したときに、盛氏のいかりをとりなした沼沢政清が黒川に人質となっていたのは、横田山ノ内氏が一なした沼沢政清が黒川に人質となっていたのは、横田山ノ内氏が一なした沼沢政清が黒川に人質となっていたのは、横田山ノ内氏が一なした沼沢政清が黒川に人質となっていたのは、横田山ノ内氏が一なした沼沢政清が黒川に人質となっていたのは、横田山ノ内氏が一なした沼沢政清が黒川に人質となっていたのは、横田山ノ内氏が一なした沼沢政清が黒川に人質となっていたのは、横田山ノ内氏が一なした沼沢政清が黒川に人質となっていたのは、横田山ノ内氏が一なした沼沢政清が黒川に人質となっていたのは、横田山ノ内氏が一なした沼沢政清が黒川に人質となっている。

内文書のひとつに下記の買地安堵状がある。内文書のひとつに下記の買地安堵状がある。との山ノからも、既に、文明年間(一四六九→一四八六)頃にある程度山ノの氏が自分に従う地方領主に対して買地安堵として加判していること氏が自分に従う地方領主に対して買地安堵として加判していること、声名また、『山ノ内武行氏所蔵文書』(南郷村鴇巣)によると、芦名

(芦名盛高)

花押

一次

違 状如件

文明拾五年癸卯十月十日

## 五 小巻館と細越館

このように山ノ内氏と芦名氏との支配関係が入り交じっていたの

が中世末期の柳津のすがたであるが、大別すると柳津から南西部 会津郡北会津村西麻生に住していたが芦名盛隆によって大永年中(一 現在の新井田甚助氏の祖である新井田氏は芦名盛信の代に現在の北 名中期に滝谷館皆川七郎の別館出城であったともいわれる。さらに、 ろに、この小巻館を築いたものと推測される。 三九〇)に岩谷城を築いて城代井上河内をその警固の任にあてたこ 城の支館がおかれたが、おそらく芦名氏家老松本図書が明徳元年(一 山ノ内氏、北西部は芦名氏の支配下にあったといえる。 築いたのかもしれない(下巻 ので(『新井田氏家系図』)、 五二一一一五二七)に、 小巻には向館、館跡とよばれるところがある。ここには滝谷岩谷 新井田重俊が西麻生より小巻に所替された 集落誌 あるいはこの重俊らがこの小巻館 小巻参照)。 また、他の説には芦

明らかである(第七章観光 第一節虚空蔵信仰と観光参照)。る。原の館がこれで現在も原屋敷の地名を残し、吉種の墓と伝える古墓もある。猪俣氏は江州(滋賀県)にあったが、会津に来て芦名氏の旗下に属し、中世末期に細越に館を築きここに居住した。吉種がその領主の勢威をもって天正十五年に鋳工早山定継をして大鰐口を鋳造せしめ、円蔵寺虚空蔵堂に寄進したことからも、その居館は一方、芦名氏支配の館には細越の領主猪俣吉種が居住した館があ

## 六 小巻河原の合戦

いる。の軍とこの小巻館の付近、柳津の渡、小巻河原で合戦したが敗れての軍とこの小巻館の付近、柳津の渡、小巻河原で合戦したが敗れて天正六年二月十三日から十五日にかけて、山ノ内重勝は芦名盛氏

した。

「たの合戦は野沢の地頭大槻政道が芦名氏に怨恨か憤りを持ち、野のため、一大槻らは野沢の地頭らと娘婿である西方地頭山ノ内重勝ら山ノ内連合勢力沢周辺の地頭らと娘婿である西方地頭山ノ内重勝ら山ノ内連合勢力に高切の地頭らと娘婿である西方地頭山ノ内重勝ら山ノ内連合勢力にあるの地頭に向かい、芦名の平田・佐瀬・富田・伊藤の諸軍と対峙の片門の渡に向かい、芦名の平田・佐瀬・富田・伊藤の諸軍と対峙の大槻政道が芦名氏に怨恨か憤りを持ち、野した。

上總らの部将を率いてここに向かい、ここに柳津の渡を中心にしてに向い、芦名盛氏もまた、金上兵庫・生江大膳・松本左衛門・新国一方、西方の山ノ内重勝もまた僅かの手兵を引き連れて柳津の渡

会津風土記』に、「一番の戦いがくりひろげられた。小巻河原の合戦がこれで、『新編

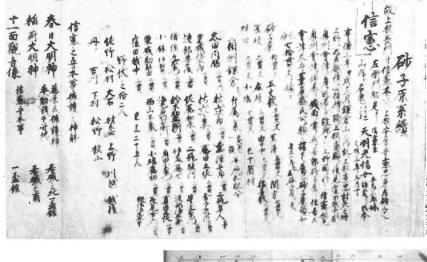
けんと欲す。十五日援兵いまだ至らぬに、山内敗して西方村に退槻これを聞て手勢を分けて塩峯峠(藤村の境内にあり)を越て援て二日計は支へしかども、元来微勢なれば山内が勢潰んとす、大「互に嶮岨により只見川の岸に傍て備を立て散々に戦い、兎角し

き

が、中途において川口佐衛門佐の軍兵に討たれてしまった。本塔寺長帳』)、 大槻政道も力を落として山ノ内領上条に向かったとあるような結果になり山ノ内軍は敗退した。このため、現在、小とあるような結果になり山ノ内軍は敗退した。このため、現在、小

# 七 伊達政宗と円蔵寺・桜本坊

った。 あったろうか。 は芦名義広の軍と磐梯山麓摺上原に戦ってこれを打ち破り会津の地 達政宗との打月斎との関係をたどってみると、 四天宿老である松本図書の兄であり、天正十三年(一五八五)五月 十三旦、 を手中に帰している。 このころの円蔵寺の住職は富山西堂といい、 天正十七年(一五八九)六月五日、会津進攻をはかった伊達政宗 『楊津秘録』を読み下し文にして、この松本太郎の反乱や伊 芦名盛隆に反した松本太郎の俗縁の伯父にあたる人物であ まず、 円蔵寺と桜本坊の動きをみてみよう。 この合戦の前後における柳津の動静はどうで 打月斎と号し、 芦名



(山内信憲が砂子原など十ヵ村を領有する)砂子原『山内氏家系図』

横田『山ノ内氏家系図』(『四家合全』より)



細越領主猪俣美濃守吉種が居住した原屋敷→

月十三日、 降を受く。 蓋し往くべきやと。師之に従う。 己れに及ぶを恐れ、壮夫三、 猶未だ命有らず。 川領主松本太郎は芦名氏四天宿老の一なり。 有って太主に見み得るや。 悪意無きをしる。然りと雖ももし和尚遁け去れば、予何んの面目 谷村を過ぐ。領主山内摂津、 さる。下総赤塚藤内の為め首を斬らる。師是れ太郎の伯父、 カ城を象取す。佐瀬河内兵を率いて城を囲み、太郎乱兵の為め殺 総と謀る。十三日盛隆夙に羽黒山東光寺に遊ぶ。太郎等以って鶴 太郎年十五に及ばば執事に列すべしと遺言す。今茲に既に十六、 の忠死に感じ太郎幼なりと雖も釆地故の如し、盛氏将に易質の時、 村領主)師之の縁にて政宗(伊達政宗)に降を請う。 に同族有りて之を避くることを私告す。 「天正十二年六月師 鈴木清八郎久しく猊座に待して頗る功労有り今大越村に住す 師打月斎と号す。」 太郎父図書仙道郡山において戦死す。盛興 太郎憤怨に堪えず、陰に森代(台)領主栗村下 (富山西堂打月斎) 田村郡大越村に出発、 師理に服して帰り謹みて命を待つ。 之に使していわく、予固より和尚に 四の輩を以て越後に奔らんとして滝 領主伊藤紀伊守、 又一老有りて進みていわ 初め三年 (田村郡大越 政宗喜びて (天正) (芦名) 禍の 時 其 Ŧī.

して伊達政宗に接近した円蔵寺住職富山西堂こと打月斎は と記述されていて、円蔵寺と伊達政宗との接近ぶりがわかる。 とう

鬱憤ヲ晴而芦名ヲ責亡可、申 政宗公様江御随身之義申上 会津迄政宗公様之御案内仕上」る 富山西堂多月斎と名改仕

### 『桜本坊文書』)

笈

円蔵寺に傾倒し円蔵寺と軌を一にして、 あたり幼名を松千代丸といったが、柳津桜本坊宗長の跡をつぎ、天 政宗に接近している。元来、長栄は沼沢丸山城主沼沢出雲守の弟に 正十五年には、 ようになったのである。 た柳津六坊の一たる桜本坊長栄 『柳津虚空蔵縁起絵巻』 また、 当時の柳津円蔵寺と深い関係を有し (長悦) ę (現円蔵寺所蔵)を著して これと同一行動をとり

召 略被,仰付 摺上原と申所御陣場に被成置、其砌拙僧祖桜本坊御陣場迄被為 密々ニ御頼ミ事柄ハ、其元兄沼沢出雲守ニ味方為、仕候様計 則奉。承知 右之次第兄出雲守江能キニ取計」

うようになり、 さらに

運送仕差上候」(『桜本坊文書』) 守札幷献上物等仕 公様より御直筆之御書箱 畳百三拾畳御無心被,'砌付,候ニ付 虚空蔵於、宝前、 御利運之御祈祷被,仰付 為、夫御勝利二被、成 其上畳御行当ニ付政宗 抽丹精 早速 御

畳を寄進するほどになっている。すなわち、 所収されている とあるように摺上原の合戦に勝利を得た伊達政宗のために畳百三十 『新編会津風土記』に

坊相談之上、 様に可い有い之候、 態用一行候、 可、被、及、理候、 当寺衆徒中、分沼より畳百三十状被」越候様、 吉事重而 恐々謹言 其内少敷候共不、苦候、 六月廿八日 早々相越候 桜本坊 塔之 政

る。というのが、この桜本坊宛に畳百三十畳を無心した政宗の書状であというのが、この桜本坊宛に畳百三十畳を無心した政宗の書状であ

かれ、 とのように政宗につくした桜本坊長栄は、政宗よりその望みをき

由」 「御治国之後は御祈願所ニ被,仰 付, 御領内中之宿坊ニ被"成下,度

立ち寄ったことをさすのかは明らかでない。
立ち寄ったことをさすのかは明らかでない。
立ち寄ったことをさすのかは明らかでない。
立ち寄ったことをさすのかは明らかでない。
立ち寄ったことをさすのかは明らかでない。
立ち寄ったことをさすのかは明らかでない。
立ち寄ったことをさすのかは明らかでない。

## 八 中世期における柳津の集落

各集落に分散居住したと記述している(『鈴木家来由記』)。という。それが子孫の人数が多くなったために、それぞれに前述のより故あって現在の滝谷川上流地、昭和村小野川に居住地を定めたより故あって現在の滝谷川上流地、昭和村小野川に居住地を定めたまり故あって現在の滝谷川上流地、昭和村小野川に居住地を定めたまり、大成峠、小野川、古屋敷、桧原の各集落には鈴木姓のも登集落に分散居住したと記述している(『鈴木家来由記』)。

が、小野川中崎に、「中崎に館跡あり、鈴木弥太郎という者住めり」大成沢・漆峠に居住する鈴木家家系図に鈴木弥太郎の名がみえる

現在の芋小屋の集落との関係は明らかでないが、星家と杉原家とは のほかに、 西念寺が距離的に遠いこともあって柳津町奥之院に変わっている。 峠・古屋敷の寺は砂子原の西念寺で共通していた。 移住関係の開拓過程を証するのではあるまいか。 ること、事実、石坂に多い岩渕の姓が長窪に多いことなどが、こ との関係では古記録に石坂から長窪へ出住したことが記載されてい 石坂が椿の端村であり、 出住開拓過程と藤→長窪への両方のすがたが推測できる。 された集落と考えられる。 相前後して居住したと伝えている。石坂・長窪なども中世期に形成 ら転住してきたといわれ、岩沢地内に居住跡と思われるものがある。 もあったと考えられる。芋小屋の場合には伊南郷熊倉・小林方面 このように中世に入ると、古代に居住地となっていた既成の集落 『新編会津風土記』)とあって一連の関係があるし、大成沢・漆 他の地方から入来してきた人々によって開拓された集落 長窪が藤の端村であったこと、石坂と長窪 との集落の場合には、 椿→石坂→長窪の ただし古屋敷は 近世期に

またはとの時期の以前、以後かは明らかでない。ったと伝えるが、鳥屋の集落がこの時期に現在地に移住したものか、正十七年に五十嵐越中常信が戦場より下民となって鳥屋の村長とな鳥屋の場合には、もと古宮の下方に集落があったといわれる。天

ていたことであり、花田・花立・人形館・中丸・立場・丸山・石神い例が合十村といわれて、郷戸原にあった十に及ぶ小集落が散居し中世の柳津の集落には散居村のかたちがみられたようである。よ

するものと考えられる。

野老沢・麻生・小巻・椿・石坂・牧沢・五畳敷・田代などこれに類分れて居住していたといわれる。湯八木沢・琵琶首・細越・大野・沢も上村・杉山・谷滝・中平・上中平・下ノ原・博士山の七か所に大成土屋敷・林崎・田向がそれにあたる。安久津の場合には、同様に上

平• 須宇座・宮ノ原の小集落が残ったといわれる。 がおこり、 の時期にみられることが多い。 地 Ш 琵琶首・湯八木沢と同様であり、 江入道屋敷跡がある)などがあったといわれる。 小集落に分散していて、 あげたと伝えている。 て現在地の居平にこれら小集落が合体して湯八木沢の集落をつくり た小集落が弘治元年(一五五五) また弘治元年の山崩れによって壊滅したために上琵琶の居住者は下 ・に一か所に集まって村落を形成するようになったのも、 これらの散居村 の字前田の地を中心に集落を合体したといわれている。 ・谷滝・中平・上中平・下ノ原・博士山の七つの小散居村が現在 災難や生活上の必要性、 松倉・高清水方面に転住したといわれている。大成沢の場合も そのためにこれらの諸集落が壊滅して、わずかに下村 (散村) 琵琶首の中世までの集落の状況もいくつかの 台 の形で三々五々に散らばっていた小集落 (上琵琶)・古屋敷・森の平・入道 または支配者の政策などによってしだ 湯八木沢の場合には栃ノ木原にあっ の大地震によって湯ノ嶽の山崩れ 弘治元年の災害にあった上村・杉 この災害を契機とし これらの小集落も との中世 近

岩倉の集落は山崩れにあって現在地に移住したといわれるが、この小巻の場合には、向館・居平・岩倉などに小集落があった。特に

山崩れは慶長の大地震(一六一一)と考えられる。

五畳敷の地名発祥はいわゆる高倉宮伝説に宮がこの中丸邑を通行なれたさい、村人が五枚のむしろを持ち寄ったのが一かに集まったところから村名が起ったとする説もある。この地域に今でも中丸という地名があり、そこに数多くの住居跡がみられるのでそこが本村跡ではないかと古老が語っていることからも、集落の移住のあったことはないかと古老が語っていることからも、集落の移住のあったことはないかと古老が語っていることからも、集落の移住のあったことはないかと古老が語っていることからも、集落の移住のあったことはないかと古老が語っていることからも、集落の移住のあったことはないかとは、大田の大田のでは、東京である。

ろう。 は 集団から現在地に居住したかは不明だが、もとは三々五々の散村だ おそらく大野が集合村を形成した時期はそれ以前のことになるであ ったと推測される。 白山神社一社で三つの小集団信仰を有していることは、 大野には鎮守 近世初期、 その集合村として村を寄り合わせたさいに、 寛永年間 (氏神) 大野から大野新田の新しい集落が開拓されたの が三つあることは興味深い。 (一六二四~一六四三) のことであるから、 自分の散村時期 熊野神社二社 どの系統の

えられる。 に崇拝した神を建立し、守護神としたのがこれら三社であったと考

思う。
したが、近世以降等については第三章集落誌を参考にしてほしいとしたが、近世以降等については第三章集落誌を参考にしてほしいと以上、わが柳津町においての中世における集落の成り立ちを概述

## 九 中世の柳津文化

またこのとき真言宗を改めて曹洞宗としたともいわれる。中世に入ると柳津の集落には多くの寺社が建立されてくる。中世に入ると柳津の集落には多くの寺社が建立されてくる。中世に入ると柳津の集落には多くの寺社が建立されてくる。中世に入ると柳津の集落には多くの寺社が建立されてくる。中世に入ると柳津の集落には多くの寺社が建立されてくる。

あったという(『新編会津風土記』)。との薬師堂が再興され、棟札に、「本願聖人明鑁大旦那平盛詮」と後に寛正二年(一四二六)には会津領主、芦名盛詮の力によって

地百五十刈を寄進したといわれる。 地百五十刈を寄進したといわれる。 地百五十刈を寄進したといわれる。 地百五十刈を寄進したといわれる。 地百五十刈を寄進したといわれる。 地百五十刈を寄進したといわれる。 地百五十刈を寄進したといわれる。 地百五十刈を寄進したといわれる。 地百五十刈を寄進したといわれる。

> 徳元年 (一三九〇) 柳津塔供養、 の円蔵寺はこれ以前のすがたが明らかではない。至徳年間以後、 の僧大圭に嗣法して法相を改めて臨済宗としたといわれるが、 によって寺領二百石を寄進する慣例となった。 この円蔵寺に対して寺領二百石を寄進し、 録』『旧事雑考』)等、 虚空蔵堂及び坊舎民屋焼亡、盛氏(芦名)施財若干再興(『楊津秘 及び人家焼亡、天文五年(一五三六)白ひげの大水、元亀二年(一 柳津本堂成り供養千部経を誦読、天文四年(一五三五)柳津村堂塔 日河沼郡柳津村火あり、堂塔及び人家焼失す、享禄四年(一五三一) 延徳三年(一四九一)修理仏殿、 天正十八年(一五九〇)九月三日に柳津参詣をなした豊臣秀次は 五七一)柳津虚空蔵堂修飾、 至徳元年 (二三八四) 柳津の集落と円蔵寺の災難が数多くあった。 円蔵寺の住義乗は霊夢によって黒川興徳寺 天正七年(一七七九)正月九日柳津火災 永正十三年 (一五一六) 三月廿八 応永三年 (一三九六) 柳津塔供養 後の歴代会津領主はこれ 中世 明

また、この円蔵寺には連歌師猪苗代兼載が止宿し、

の句をものしている。

一川ぎりや音に船ゆくゆうべかな」

十五年には、桜本坊長栄及び画工雪洞によって『柳津虚空蔵縁起絵に指定されている(第七章観光・奥之院の創立と弁天堂参照)。天正地方にまれな手法を刻している佳堂である。現在は国の重要文化財助、方三間の小堂ながら純粋の唐様建築であり、絵様彫刻は東北柳津門前町にある奥之院弁天堂は室町時代応永年間の建築と伝え

定継をして柳津虚空蔵堂大鰐口を鋳造せしめ、これを奉納している。巻』がつくられている。また、同年には細越領主猪俣吉種が、早山

## 10 近世柳津への開幕

石田三成に命じて返答書を送り、抵抗している。また、横田山ノ内氏勝に支援を請われた豊臣秀吉はところで、横田山ノ内氏一族は、この伊達政宗に対して最後まで

を持ちこたえるように氏勝を激励している。として、今しばらくの間は山ノ内氏の持城である大塩、水窪の両城首落着候」

北条御成敗議定候間、

其直二黒川江被成御乱入、政宗可被伐刎

甚左衛門、 越渡の児島越中、黒沢の渡辺宗九郎、 に待ち構えていたのが山ノ内勢で、 川口に達しようとしたのである。ところがこの左靱と対岸の戸板平 そこから只見川を船で渡って宮下の南に出て、難所左靱を経て沼沢 椿に船で渡り小和瀬に向かった。ここで戦いがあり、いったん退い 勢は、黒川から塔寺、七折坂をすぎ、八坂野あたりから対岸の藤、 て五百騎をもって討伐せしめた。『山ノ内天正記』によると、伊達 た伊達勢は大久保 ノ内勢を敗り、再び小和瀬にはいりそれより西方から高清水へ進み、 これに力を得た氏勝を伊達政宗は天正十八年四月、大波玄蕃とし 大谷の五十嵐豊後、 桑野原の二瓶安左衛門等七十余人が左靱に、 (麻生の南にあった村名)から脇道にはいって山 宮下の宮下大膳、 滝谷の山内内丘之助、 中野の中丸越中、 飯岡の飯岡越後、 滝原の佐久 田代の鈴木 大登の渡 遅

を越えて野尻牛首城に入ったのである。

ここを退き、道を転じて大谷・桑野原・間方への道をとり、美女峠でしまった。しかも、山ノ内勢の数計り知れずと考えた大波玄蕃はでしまった。しかも、山ノ内勢の数計り知れずと考えた大波玄蕃ははまった。しかも、山ノ内勢にさんざんに打ちかけられ、戦いに窮したがは、単戸の佐久間新蔵等が農民四十余名を語らって戸板平にひ

到着するに至っている。 到着するに至っている。 の中山城を固く守り、加えて越後の上杉景勝も秀吉の下知として 生物に差し向けられ、この援兵は八十里越の天険を経て只見水窪城、大 はの中山城を固く守り、加えて越後の上杉景勝も秀吉の下知として はの中山城を固く守り、加えて越後の上杉景勝も秀吉の下知として との後、金山谷に進攻した伊達勢と山ノ内勢との戦いはなかなか

ている。

ている。

でいる。

よって完成され、長い中世の時代は終わった。北条氏は滅亡した。ここに信長以来の天下統一の事業は秀吉の手に天正十八年(一五九○)七月五日、秀吉は小田原城を陥落させて

八月十日、奥羽両国の検地条例を告した秀吉の方針は、「山の奥、八月十日、奥羽両国の検地条例を告した秀吉の方針は、「山の奥、四年後の検地には、九十一万九千三百二十石の石に、十八万五千五十石の打ち出し(増高)となり、二割五分にを示し、十八万五千五十石の打ち出し(増高)となり、二割五分にを示し、十八万五千五十石の打ち出し(増高)となり、二割五分にを示し、十八万五千五十石の打ち出し(増高)となり、二割五分にを示し、十八万五千五十石の打ち出し(増高)となり、二割五分にを示し、十八万五千五十石の打ち出し(増高)となり、二割五分にある。

ども、少しも未進

村当村物成相定」を付して中世への結びとしよう。 最後にわが柳津町の近世への開幕を告げる「文禄三年稲河郡富士

稲河郡富士村当物成相定

高百九拾七石四斗七升

内廿八石七斗八升荒有其外算違

失人屋敷何もおしこめて

五ツ成

物成 永楽拾四貫百五文者

右 61 之通 か ょ う 相 0 定 上 儀 雖」有 者 之 不」可」有"相 少 6 無未 違 進 惣 請 可,人 = 申 弁,者 付 候

也間

文禄三年拾月六日

御代官 石橋半助

蒲生四郎兵衛

判押

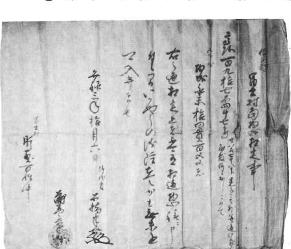
富士村

-木

肝煎百姓中

そして、それはまた農民にとって「いかようの儀とれありといえた農民たちに、中世の時代に別れを告げるものが示されている。との一片の通牒には、長い戦乱の世も治まりようやくに平和を得

なく入弁すべきものなり」とする厳しい示しでもあった。こうして近世をされた。近世をされた。近世が、農民桎梏の世が、農民桎梏の世が、農民桎梏の世が、農民桎梏の世が、農民桎梏の世が、農民桎梏の世



近世への開幕『文禄 3 年藤村年貢相定』

### 村 名 土質 村高(石) 村 土質 村高(石) 塩 野 下 172.64 嶺 Ł 大 65.41 代 猪 鼻 下 67.08 田 上 266.30 黒 下 滝 5.028 牧 沢 上 86.85 中 漆 峠 下 20.28 長 倉 164.94 郷 下 丸 Ш F 683.95 琵 琶 首 47.09 野 中 中 大 99.57 五帖敷 (五畳敷) 73.93 小 子々妙 (九々明) 下 下 32.91 10.50 津 小野川•中野 中 154.95 之 L 84.59 藤 下 197.47 潟中 (沢中) 中 12.25 細 越 中 207.55 中 49.42 大桑良沢(大成沢) 矢坂野 (八坂野) 下 125.78 中 64.80 伊豆倉(出倉) 軽沢 (軽井沢) 中 51.5 中 175.90 • 小 中 180.98 沢 下 74.44 悪登 (安久津) 下 268.01 かふ中 (胄中) 下 142.80 椿 下 沙子原 (砂子原) 75.32 Ł 191.61 安佐右 (麻生) 下 85.56 木 沢 E 186.54 1 津 (柳津) 中 芋之小屋(芋小屋) 中 115.53 28.45 所沢 (野老沢) 下 158.53 村 9.10 計18か村 2,846.788 計 18か村 1,590.26

### 交禄検地による柳津地方の各村村高表

### 第 四 節 近 世

### 蒲生 1 加 藤氏時代

(-)

前期蒲生・上杉時代の柳津

文禄検地を実施した蒲生氏郷が、 当柳津地方に打ち出した村高は

左記表のとおりである。

高は、 貫七七○文で納入している。 率ではなかった。 五九七)に砂子原では、 は永楽銭一四貫一○五文で納入するように命じられ、 て米と永楽銭とを半々にしていたが、 村の年貢高を算出するが、 を算出する場合の重要な基礎となっている。 計村高は一五九○石二斗六升であった。この文禄検地での各村の 二八四六石七斗八升八合であり、 |村高に対して五〇%の年貢を課せられているが、 てはいない。 これによると、 近世において本田と呼称された最初のものであり、 例えば、 また、 稲川郡 村高一九一石余の租率四三%を永楽銭一 文禄三年 (一五九四) 当時の年貢納入は「半石半永の制」とい に属した旧柳津地区一八か村の合計村高 この租率は村ごとに異なっていて同一比 村数一八を有した旧西山地区の合 柳津地方は必ずしもこれに 村高に租率を乗じて各 に藤では一九七石余 その物成 慶長三年 村の年貢 和

円蔵寺領二〇〇石(一説には四六〇石、 となり、 土地の反畝を検して貢税を定めたが、 石七箇が流され、 前是采地為四百六十石益所謂押領者」の文言がみえる) 文禄三年 これよりさき天正十八年 以後、 が只見川 当時は内田屋旅館裏にあった虚空蔵堂の舞台と周辺の名大 蒲生秀行、 (一五九四) 0 JΠ 底に流没した。 さらに翌四年八月十日の大雨洪水には華鯨 加藤嘉明、 六月十七日、只見川は大雨のために大洪水 (一五九〇) なお、 保科正之らも契券を与えている。 柳津村には藩領と寺領とがあ 氏郷は豊臣秀次の命を受け、 この年円蔵寺では寺領 『楊津秘録』に「桜本坊書 を寄進した (つり

地震は、

柳津地方にも大きな被害を与えている。

とりわけ飯谷山の

Ш

崩れは大杉山村全村を土中に埋没させ、生存者わずかに五名、死

この秀行の悪行直後八月二十一日に会津一帯を直撃した慶長の大

小川家が就任している(『小川家家系図』)。煎のほかに、寺領肝煎が設置されていて、この職には代々寺家町のって他村とは異なった支配のすがたがみられた。柳津村に通例の肝

慶長三年(一五九八)蒲生秀行は宇都宮へ転封させられ、代わって上杉景勝が会津に入部した。景勝は会津の漆樹栽培に力を入れ、 芋小屋村では漆木数一、三〇〇本を定められ、上漆一三盃、上蠟九 費余の上納を命じられて若松御蔵に運んでいる(『新編会津風土記』)。 この景勝は柳津の福満虚空蔵尊を信仰し、越後投野村の租二〇〇石 円蔵寺寄進、越前青石による三五仏寄進、塔之坊への書状、近臣に 以る代拝などにその片鱗がうかがえる。

## 〕 再蒲生・加藤時代の柳津

倉のあたりから只見川に毒を流して多くの魚を獵している。 長六年(一六○一)九月である。この蒲生秀行と柳津の関係も深い。 長六年(一六○一)九月である。この蒲生秀行と柳津の関係も深い。 見六年(一六○一)九月である。この蒲生秀行と柳津の関係も深い。 長六年(一六○一)九月である。この蒲生秀行と柳津の関係も深い。 関ケ原の戦功によって蒲生秀行は会津六○万石に再封された。慶

伝説があって、瑞光山、後に瑞光寺山の地名を生んでいる。

伝説があって、瑞光山、後に瑞光寺山の地名を生んでいる。

伝説があって、瑞光山、後に瑞光寺山の地名を生んでいる。

伝説があって、瑞光山、後に瑞光寺山の地名を生んでいる。

伝説があって、瑞光山、後に瑞光寺山の地名を生んでいる。

大杉山村となっている。他に柳津地方では黒沢・砂子原・牧沢・れによる湛水と三島町戸板平の決壊とが重なって柳津村が水中に没れたよる湛水と三島町戸板平の決壊とが重なって柳津村が水中に没いた。

大杉山村となっている。他に柳津地方では黒沢・砂子原・牧沢・でも湛水した。さらに霊巌山の大岩が崩れ落ちて有名な亀石、畳石でも湛水した。さらに霊巌山の大岩が崩れ落ちて有名な亀石、畳石でも湛水した。さらに霊巌山の大岩が崩れ落ちて有名な亀石、畳石でも湛水した。さらに霊巌山の大岩が崩れ落ちて有名な亀石、畳石などができ、同時に虚空蔵尊の舞台も倒れて川中に転落した。このとき虚空蔵尊及び賓頭盧尊が瑞光を発して対岸の山に留まったとのとき虚空蔵尊及び寛頭盧尊が瑞光を発して対岸の山に留まったとのとき虚空蔵尊及び寛頭の舞台を倒れて川中に転落した。このときできたのが白沼をは、

村に対しても、との地震による災害には年貢の減免措置がとられたらしく、胄中の地震による災害には年貢の減免措置がとられたらしく、胄中

慶長拾六年八月廿一日之ちしんに付而は、たてつれ迷惑仕候間、

めん一つ六分にゆふしや申候間………(『新編会津風土記』)

次)、翌十八年(一六三三)四月にこれを掛けている。 たと考えられる。翌十七年(一六六二)にも再び柳津に地震があったを考えられる。翌十七年(一六六二)にも再び柳津に地震があったが、おそらく他の災害を受けた村々もとれに準じとの達しがあったが、おそらく他の災害を受けた村々もとれに準じとの達しがあったが、おそらく他の災害を受けた村々もとれに準じ

を加えるに至った。

観光の町柳津の象徴たる虚空蔵堂(菊光堂)の歴史に意義ある一頁蔵堂が旧地を移して霊巌山の巌上に大堂として再建されて、信仰と一元和二年(一六一六)円蔵寺再建、翌三年(一六一七)には虚空

意永四年(一六二七)五月五日加藤嘉明が会津に入部した。同八度永四年(一六二七)五月五日加藤嘉明が会津に入部した。同八年のとおりに契券した。加藤氏の治政は一般に苛酷であったといわれ、寛永四年以降の収納の制は米一斗京銭一○○文、金一分に京われ、寛永四年(一六二七)五月五日加藤嘉明が会津に入部した。同八たろうか。

斎藤家文書』)。こうした時期に大野新田が開村されたのである。奪のすさまじさが重く藤村民にのしかかっていたのであった(『藤村にる。さらに十八年(一六四一)に至っては免七ツ六分、年貢金三両判・一分判通用に従って金三三○両、京銭六○○文が課せられて

に軽井沢銀山の定めがなされたほどであった。及んだといわれ、寛永二十年(一六四三)に保科正之が入部すると直ち増加して、寛永期には月産三、四〇貫と最盛期に達し、人口千人に

ところで、この加藤氏治政の時期に軽井沢銀山の採銀量は急速に

# 二、保科氏(松平氏)時代

# | 保科氏(松平氏)の支配(組と村)

郷、山郷に二分され、七折坂から下の大沢・朝立・和泉・平井の四 寛永二十年(一六四三)保科正之が会津藩主となり、私領二三万 石とともに幕府の領地南山御蔵入五万五、○○○石を預地とした。 ともありいちようでないが、会津藩主の保科氏(松平氏)の会津支 配は、いわゆる会津藩として近世末期まで一貫して継続されている。 配は、いわゆる会津藩として近世末期まで一貫して継続されている。 では旧柳津町が藩領で旧西山村が幕領である。また旧柳 神市のうち藤村が野沢組、軽井沢村が高田組でそれを除いた柳津村 はか一九か村は牛沢組に属していたが、牛沢組は七折坂を境界に里 はか一九か村は牛沢組に属していたが、牛沢組は七折坂を境界に里

か村を含めた合計二四か村は山郷であり、

俗に柳津郷とも称してお

滝谷組 = 滝谷山

ノ内家、

大谷組=大谷二瓶家など)、各村には村長と

さて、

これら各組を支配する長が郷頭で (牛沢組=牛沢佐原家

して名主(肝煎ともいう。俗称親方様(オヤガッツアマ)。

藤村斎藤

(地首、

安久津増井家、

例えば椿村端村石坂の岩渕家)、百姓代(老百姓)が置かれて名主を

田代佐藤家など)があり、その下に組頭

蔵は柳津安久津村の増井家に設置されて、 屋・大成沢・漆峠・琵琶首、 計一五か村)、 滝谷・檜原・西方・大石田・名入の村々とともに滝谷組に入り(合 牧沢・鳥屋・九九明・遅越渡・沢中・高森、 元の別称を生んでいるほどである。一方、幕領 五五)の会津藩社倉制実施とも関連するが、 のずと生活関連の深い一区を形成している。 他の南山御蔵入領の各郷と区別した一区を形成しており、 ろで滝谷、 随して、一村としての独立を認められていなかったのである。 と端村とがあって、 もに大谷組に入った(合計一六か村)。なお、この時期村には格付村 大谷・河井・大登・宮下・桑原・浅岐・間方・小野河原の各村とと った旧西山村のうち東川沿いの諸村(湯八木沢・大嶺・田代・中村 相互連帯は生活上特に強かったといえる。 大石、野尻の四組は金山谷四組(金山谷郷四組)ともいわれて、 大谷の組を金山郷、 中川沿いの諸村 集落戸数の少ない端村は格付村である本村に付 計八か村)は、 金山谷と称したが、さらに滝谷、大 (砂子原・五畳敷・黒沢・胄中・芋小 そのために増井家は大蔵 西川 柳津郷二四か村の御囲 計一〇か村) 例えば明暦元年(一六 (天領、 (大谷川) 直領) は との四組 沿いの であ 他の

帳

補佐したが、名主(肝煎)、組頭、百姓代は村方三役といって村の運営に特 に発言力を有していた。

吞も五人組の中に編入されてはいるが、村の入会権を有したり、 の権利を与えていないのが通例であった。 くって共同責任の遂行と相互監視にあたり、 かるようにきびしく示達されている。 触れなど日常守るべき諸箇条が記載され、 運営の発言権を有したかどうかは明確でない。なお、 おける『藤村五人組帳』をみると、必ずしも五人単位ではなく、水 た小作人や、その他の名子、分付百姓といわれた人々には、これら て村の運営にも発言を有したが、 このほか検地帳に名請人として登載された本百姓は、 滝谷組』 (滝谷山ノ内家所蔵) によると、 同じ一村の住民でも水呑といわれ 元禄二年 (一六八九) 各村ではその徹底化をは 幕藩の示す諸法度、掟、 入会権なども持ってい 『御仕置五人組 五人組をつ 村 12

にその特徴がみられる。 という一連の支配のしくみの中で、 配者が、こうした代官、郷頭、名主 を与えて、村のひとりひとりの農民にその徹底化をはかったところ このように江戸時代の村の支配は、 農民には (村方三役)、本百姓(五人組 幕藩体制の維持を企図した支 「御大法遵守」の命令

## 一揆と村の生活

動が発生した。 配下にあった御蔵入の農民たちが、 享保五年(一七二〇)から翌六年にかけては有名な南山御蔵入騒 この騒動は南山一揆ともいわれ、 貢租負担の軽減、 当時幕府の直轄支 江戸廻米、 郷

第2章 歴 史

まった。 まった。 まった。 まった。 がおあやつりによって単なる農民対郷頭の問題にすりかえられ、根 みなあやつりによって単なる農民対郷頭の問題にすりかえられ、根 のもとになんらの のもとになんらの のもとになんらの のもとになんらの のもとになんらの のもとになんらの のもとになんらの

名 は、 として、芋小屋三名、 名の決定など重要事項が議されている。また、一揆の犠牲者として 民の郡中大会が開催され、 んだが、その歴史的足跡は尊い。 遅越渡一名、 農民側三五名代表のひとりである芋小屋村名主五左衛門を始め の一揆のとき、 漆峠一 柳津地方では大谷組五畳敷村下の湯におい 田代三名、五畳敷五名、 名 幕府への訴状提出の決定と農民代表三五 計一六名の人々が処罪される悲劇を生 胄中二名、 砂子原 て農

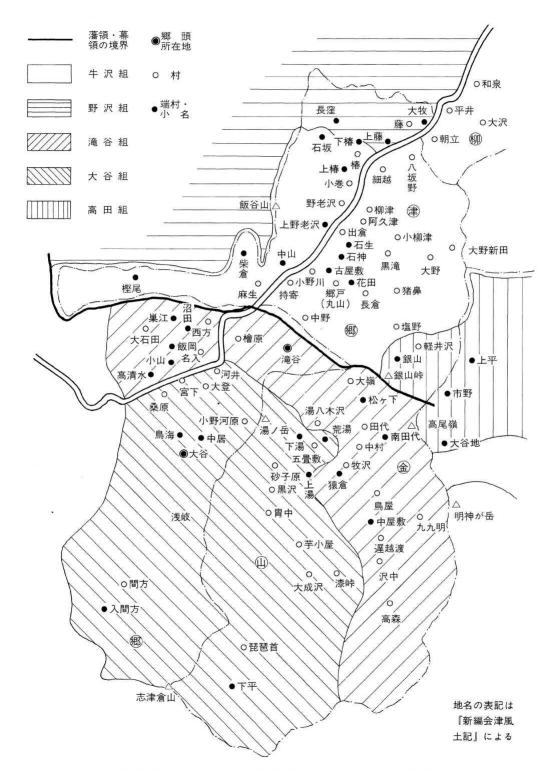
最低で五六%、 正保二年(一六四五)から天明五年(一七八五)にかけての租率は 五 かった。郷戸村五か村亡滅説や、 ていったが、 行などが素因となって、 ゆるやかな租率とは言い難いものがあった。こうした貢租の過重と 方、 の領内総検地による村高四九石余の打ち減しがあったにせよ、 天保に代表されるたび重なる凶作、それに付随する悪疫の流 藩領における藤村の年貢納入をみると、延宝三年(一六七 柳津地方の各集落もまたその例にもれることは免れな 最高では驚くなかれ九一%にも達していて、 会津領内の農村はしだいに困窮の度を加え 藤村一二〇戸が半減して六〇余戸 決して

となったのはそういった村勢衰退の一例に過ぎない。

開発、 は貨幣経済の進歩する世相に合わせて現金収入の道を求めて、 などがあったし、『新編会津風土記』に記述されているように、「滝 営ミ薪ヲ伐リ商売ス」る村々(八坂野、 のであった。『牛沢組郷万改帳』などの各資料によっても、「此村ノ を採り、麻を植え、蚕を養い、 り、「秋ニ至リテ鮭鱒登り鮠川戈雑喉アリ」という只見川、滝谷川で 津村のように「此村ノ営ミ参詣之者ニ宿ヲシ幷駄賃ヲ取」る者もあ 猪鼻)、「紙ヲ漉キ薪ヲ伐リ商売ス」る村々(野老沢、石坂、麻生)、 貴重であったといえる。 の漁獵りや、 ……常に麻を植へ蝅を飼て」生計の資としたのであった。また、 谷組……里民大低蝅を養い、紙を漉き産業を膽は」せたり、「大谷組 こうしたきびしい江戸時代にあって、 堤堰の構築などの生産基盤を徐々に進めるとともに、 広大な山での紫蕨、 紙を漉き、 蕨とりなども生活の糧を得るのに 細越、 柳津農民は営々として新田 魚を獵り、荷駄を扱った 出倉、郷戸、長倉、 一方で 薪炭

強力な反対を受け実現しない)などのいわゆる村出入である。い)、市場争い(柳津村が市場格付けを訴願したが結局は坂下市場の辺諸村など)、川争い(滝谷川漁獲権をめぐる藩領民と幕領民の争た。山争い(麻生と西方、樫尾と大石田、八坂野と柳津、鳥屋と周しかし、こうした生活の糧を得る場の獲得には時折争いが発生し

なかで、全国的な農民一揆の多発を生み、近代へと進むのである。とうした近世柳津農民の苦難の道は、幕藩体制の矛盾が激化する



江戸時代における柳津地方の郷・組・村図

## 幻の「絵銭」

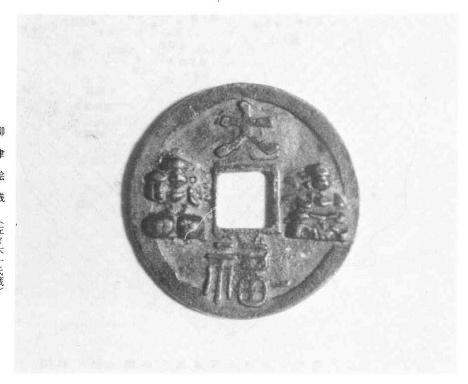
しかし小柳津の佐々木一氏(現在東京住)の好意によりその存在幻の絵銭として伝えられていた。柳津に『絵銭』があったという風説があったが現物は見あたらず、

矢部倉吉著『古銭の集め方と鑑賞』昭和五十年九月金圜社発行に地内より発見し保管しておいたものである(写真)。が確認された。それは昭和四十五年秋脱穀作業中、小柳津の大久保しかし小柳津の佐々木一氏(現在東京住)の好意によりその存在

次の記録が掲載されている。 矢部倉吉著『古銭の集め方と鑑賞』昭和五十年九月金圜社発行に

### [柳津作]

手県の一ノ関あたりであるとの訳もある。との折二型は成田不動の銭文などがあるところから、製作地が岩



裏面 無 文 中央に一片五ミリメートルの正方形の穴 中央に一片五ミリメートルの正方形の穴



課税が七十パーセントとなった。 元禄二年(一八八九)(藤・斎藤文書)免定(年貢割付状)

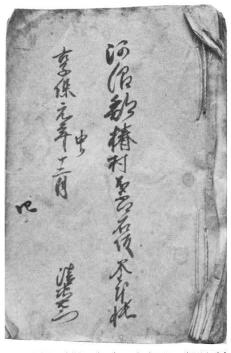




免定 (年貢割付状)・明和7年 (1770) (藤・斎藤文書) 3か年定免制といって、同じ課税が3年間続く。



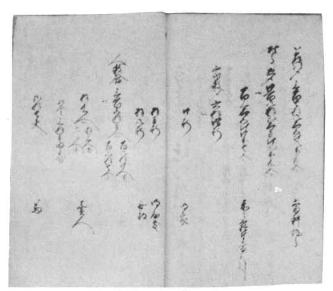
石坂の風俗覚書・貞享2年(1684) (石坂・岩渕文書)



蠟釜本帳・享保元年(1716)(石坂・岩渕文書) 余り蠟は藩が買い上げ現金を得た。



山争いによる山境改帳 寛文 IO年(1670)(石坂・岩渕文書)



天保10年(1839)の藤の村況 空家、空屋敷、無跡49軒の記録がある。

